

北辰全集

第五卷

105



雜記部

北 辰 會 雜 誌

千九百二十六年三月

夢みる力のない者は生きる力がない

目次	
人	瓜生順良 (二)
少女・犬・人形	脇山康之助 (四)
雪降る日小説	星野明 (二元)
詩 六篇	(四三)
ぶらんこ戯曲	加藤一雄 (五四)
修二の御祈り小説	樫村實 (六六)
北辰會部報	
六號雜記	
編輯後記	

人	間	感想	瓜生順良	(二)
少女・犬・人形	小説	脇山康之助	(二四)	
雪降る日	小説	星野明	(二九)	
詩 六篇	………	………	(四二)	
ぶらんこ戯曲	………	加藤一雄	(五四)	
修二の御祈り小説	………	樫村實	(六六)	

人間

瓜生順良

霜月も半ばを過ぎたのに、今日は氣持のよい温さだ。どこかに身をひそめてゐた一匹の蠅までが、のさばり出て書架の邊りに遊んでゐる。秋の太陽は其の蠅の背越しにさしこんで来る。私は今相談ごとを終へて座つてゐる。そして静かに頭を上げて窓外を打ち眺めてゐる。紅葉色濃き一樹を包んで空は一面の青さだ。時時吹いてくる風に誘はれ、一葉二葉は自由の身を大地に横へる。蠅はものうさうに机上に飛んで來た。私は筆を取上げた。筆性ブツキラ坊な私、ブツキラ棒に書き出す。秋の午後、日は暮れ易いのに。

〔一〕

我々は色々なことを考へたり、行つたりする。そして悲しんでみたり、力んでみたりする。併し我々は神でもなければ、犬や木石でもないのだ。何と言つても人間なのだ。瘦せても枯れても、人間なのだ。勿論肥

えても威張つても人間なのだが。畢竟人間なのである。

我等は人間である以上、其處には人間的要求がある。そして我々は此の要求から半歩たりとも踏出すことは出来ない。泣いてみても笑ふてみても、人間的要求を離れることは出来ないのである。勿論その要求とは、世の所謂欲望とは、廣い意味である。食を求め、睡眠を求める要求でもあるが、又腹がすいても他のものを求むる爲に食はないのを求める要求であり、又眠くとも或場合には徹夜をしよとする要求でもある。そして我々はさうした要求を離れることは出来ない、と言ふのである。我々は色々偉さうな事を掲げて、それを生活の目的としようとする。やれ、精神主義だ、やれ、個性の擴大發展だ、やれ、愛に生くるのだ、やれ、社會奉仕だ、やれ眞理への奉仕だ、やれ、神への一致だ……と枚舉に遑もない位に色々様々なことを言ふ。併しどれも之も人間的要求から一步も踏み出ることが出来ないのではないか。さうした目的に達したい、さうした主義に動きたいと言ふ要求に動いてゐるのではないか。「いや、俺には何の主義も目的もない」と頑張つてみても、さう云つて頑張りたい要求であり、主義目的なしに生きようと言ふ要求に過ぎない。又總ての欲望を捨てん、と言ふのも捨てることを要求するのであり、又捨てることにより精神的な喜びを得るのである。ウパニシャツドにも、「爾は捨てることによつて得可し、爾貪る勿れ」と言へる如く、矢張何かを求め得るのではないか。總ては疑はしいから「どうでもなれ」の氣分で生きるのも、そのやうに生きたい爲の、人間的要求によるのではないか。人間である以上、意識的にあれ、無意識的にあれ、人間的要求によつて動くのである。人間的要求の埒内に動いてゐるのである。

實に人間的要求は、我々が考へ行爲することの源泉である。人間世の無情を感じ、汚濁を厭ひ、世を通れて隱遁生活をするにしても、難澁變轉の世を出で、靜寂なる生活をしたことの要求によるものである。莊子が「總ては夢だ、夢だと言ふのも夢だ。善と云ひ惡と言ふのも夢。我は是非を絶せる無何有之郷、無竟に遊ばう」と言つたのも、世の醜醜を超越して無竟に遊びたいとの要求があつた迄のことである。無爲恬淡無抵抗に生きんとした老子も、俗人の及びもつかぬ無爲虛無の大道を求めたのである。無欲とは無欲によりて常人以上の或る愉悅を求めてゐるもので、常人以上の欲深者さへ言ひ得る。又君の爲、國の爲死ぬと言ふのも(世に言ふ反對給付の要求でなくとも)、君國の爲に一命を捧げたいとの要求に出で、煩悶の極自殺するの、つまり煩悶するより死ぬ方がよいと言つて死を求めた要求より出るものである。釋尊が山に入つて、吞まず食はずで人間の欲望を斷滅しようと言つたが、遂に其の徒勞なるを悟り、結局小欲の消え去れる大欲の覺者即ち佛陀となられたと言ふのも、畢竟人間は人間の要求を出ることの出来ない事實を示すのである。そして佛陀は遂に「食欲これ涅槃、悲癡亦是の如し、是の三事の中に於て無量の佛法あり、若し人あり、食欲瞋悲癡を分別せば、是の人佛を去るの遠きこと天と地との如し」(諸法無行經)とか「婬欲即ち是れ道、悲癡亦是の如し、此の如き三事中無量佛の道あり」(智度論)と叫ばれるに到つたのである。要するに人間は人間の血の通ふ限り、人間的要求の埒内に於てのみ、かれこれするのである。哲人も聖人も仙人も俗人も同様に。この事實は否定せんとして否定し得ざる、疑はんとして疑ひ得ざる事實である。

(二)

總てが人間要求のあらはれとすれば、その人間の要求を理知とかで勝手に削つたり否定したりするのは何のことだらうか。それも又人間の要求であらうが、でも片輪の人間を作りたくはない。人間要求の總てを肯定し、人間の全性能を尊びたいのである。人間の全本能……世に言ふ……とは廣義だが……に生きたいのである。飲みもしたい、食ひもしたい、さうかと言つて二六時中飲み食ひ續けてもゐたくない。名譽をも、富をも、權力をも樂しまたいし、而もそんなものの奴隸とはなりたくない。つまり私の尊重する人間性能とは希臘神話の神の性質のやうなものである。美はしく真理に輝くかと思ふと、時には物慾を求めるのである。「眞妄迷悟の別なく宇宙を擧げて宇宙の實體なる盧舍那佛の活現なり」(華嚴經)と言へる盧舍那佛的に眞妄を含めるものである。世に人間の心は神的であるとか、獸的であるとか言つて議論されたが、まことに滑稽なことだ。人間を全的に見てゐないのだもの。神的とか、獸的とか言つてゐるが、食欲もあり色欲もあり、之と同時にこれ等を厭ふ心のあるのが、此の人間の心ではあるまいか。久米の仙人が女の脛を見て墮落したと言つても驚く要はないのである。空をかける思ひのあるのも人間であれば、女の脛を見て墮落するのも人間ではあるまいか。有島武郎氏が「私の生の欲求は思ひの外に強く深く、何物をも失はないで、凡てを味ひ盡して墓場に行かうとする。縱令私が純一無垢の生活を成就しようとも、この存在に屬するものの中から何かを捨て、しまはねばならぬなら、それは私には堪へ得ぬまでに淋しいことだ」と言へる心情に對して

も、或種の共鳴を感じるものである。

人間の要求、人間の本能の尊重。それは私の言ふ所。併し人間は人間だ。野獸でもない、木石でもない。世に本能と言へば野獸の本能のみを思ひ浮べる人があるが、それは野獸の本能かもしれないが人間の本能ではない。人間の本能は神的で而も獸的な或る多様の統一ではあるまいか。前にも言つた如く肉欲をも精神的な要求をも含んだものではあるまいか。然るに人間の要求、本能、の中から、野獸と共通な部分を理知にて引離して、概念的な純靈といふやうなものを捏造して、以て之こそ人間の性質なり、とするのは、明かに本能に對する謂れない迫害である。本能はいつも全体として働かねばならぬ。そこに眞の人間が生れると思ふ。私はその人間を求める。總てを統一し含有した人間として進みたいと思ふ。そして人間性をよりよく味ひつつ悠々進むのである。大河が萬流を合せて大海に向ふが如く、或部は岸の巖を磨し、或部は輻輳する船舶を運び、或部は深く底に觸れ、又或部は只全流れの中央を黙々として進み、そして全体として力強く流るゝ姿をあらはすのである。淋しい中央の流れ、それをのみ求むるものでもなく、雑踏の表流、それをのみ求むるものでもない、深く底に觸るゝをのみ求むるものでもなく、又岸を磨し波を激する騒々しさをのみ求むるものでもない。而も力強く突進する大河。低きを求めつゝ大海へ募進する大流。私は斯くの如き生活に生きようとするものである。

「わがすきは花に子供に本に關

女も金もきらひではなし」

(曉島)

(三)

されば理知によつて人間を勝手に束縛したくない。理知は人間性中の一從屬物に過ぎないもの。勿論、人間として理知を重んぜざるを得ないとしても、偏重したくはないのである。全的人間性に生きたいのである。思辨に思辨を重ね、抽象に抽象を重ね、而もその間全体としての生きた人間を顧みずして、以て人間の殆んど關し得ないやうな哲理を捏ね上げ、そしてその哲理の型で人間性を壓迫する事實は一体何の事だらうか。或る醫學の大家の話によると、狂人とは人間智情意の一般的發達の程度低くして或部分のみ特に發達したものだ、さうだが、かゝる理知偏重の人は醫學上のこのカテゴリーに屬するのかも知れない。それは兎に角として、理知偏重の人は實に多いのである。そして苦しんでゐる、自らの殻を作つて息苦しがつてゐる。古代の哲人にそんな人が多かつたが、又現今の我等若き者の間にも此種のものが多いのではあるまいか。漸く發達し來れる理知に幻惑されて、全人間性の流れの尊さを忘れ、混沌を作つたり、懊惱を生んだりしてゐる。なか／＼精が出て結構だが、自らの入る牢獄迄作るのは感心の到りか。人間は、理知の生んだ冷酷な概念の整理のみで作られた型にはまるものではないのだ。強いてその型にはめようとするれば、人間は死んで了ふ。自分の作つた法で自らの首を失つた賢人は、唐に商鞅、我に江藤があるが、併し現今にもその種の賢人が居はしまいか。シェリングが「概念的な思惟を以て、直接な生の過程を動かぬ死せる道具に變形して了ふ」と言つたのは味ふべき所である。事實生きた人間の世は、その理に合はぬ所もあらう。混沌だ。併し情意に輝く、

全的流れとしての人間より見れば、理知で概念的に縛りつけて説明することの出来ぬ所に、その人間の世の偉大さが横はつてゐるまいか。要するに眞理や絶對的實在を求めてみても、人間の要求により、さうと認めた丈で、人間と相對的たるを免れない以上、要は人間の要求の上に立つのが本道ではあるまいか。現實のこの人間性の全的要求によつて進むのが、人間の眞實なる生命ではあるまいか。

今此處に鐵の一貫目と綿の一貫目ありとする。どちらが重いか、と問へば私の人間性は無論綿が軽いと言ふ。理知一点張りな人は「馬鹿なことを言ふな、一貫目なら一貫目ぢやないか、一貫目の重量に鐵だのだ綿のといふ差異があるものか、その證據に秤にかけてみなさい」といふ。理屈では一貫目は一貫目でも現實の我々には綿が軽いのである。「思ふて通へば千里が一里、逢はず戻ればまた千里」といふ俗諺もあるが、理知丈で行かうとして全的な人間性を無視する人には、そんな馬鹿なことはない、と言ふかもしれない。即ち「千里なら千里、一里なら一里ぢやないか。思ふたと思はぬとて里程の差はないではないか」と言ふに違ひない。所が我々の内心の事實に面してみると、矢張り思ふて通ふ道は近く、落膽して歸る道は遠いのが眞實である。然るに此の呼吸を知らぬ理知の人は、一貫は一貫、千里は千里、一は千より小、と概念的にきめてゐる。そして生きた人間の世のことをこの筆法で觀るから、矛盾であつたり、混沌であつたり、無意義であつたりする。要は理知の殻に閉ぢ籠る爲の錯覺である。私は勿論理知を理知として重んじ、又概念をも必要とする。リツケルトも云つた如く「概念を離れては人間は生き得ない」のであるが、全人間の直接的な閃きを受け入れつゝ、理知をその人間性の一部として含みつゝ、生くるのである。人間性の大流に棹して進むのである。

若ししかなければ、クローチエも言つた如くに「哲學者に委ねるは恰も乳飲兒を男子に委ねるが如し、乳なき胸に赤兒を抱き締め、はぐくむことを得ずして、唯是を苦しむのみ」で、抱き締むる理知はあれども乳なる人間生命の流れなき爲に、息づまる思ひに苦しまなくてはなるまい。私は愛に溢れた慈母の胸に抱かれし如く、ふつくりした圓滿な人間性にはぐくまれつゝ、樂しき人生を味ひたいのである。

〔四〕

理知に捉はれないで、全人間性に生きんとすれば、矛盾は矛盾なりで統一されるように思ふ。理知が形式論理の玩具で勝手に粗末な道を作り、總てが之によらねばならぬ、と限定して見ればそこでは道を離れた矛盾もあるだらう。併し皆一なる人間が生める所で、矛盾の如く見えつゝ、人間性に統一されてゐる場合が多い。生に流動する人間の生活を、固化した論理的尺度ではかるのが矛盾のもとだと思ふ。元來人間は、全体の生きた人間として見なかつたら、矛盾が多いようにも見える。水を好むかと思ふと、水を嫌ふ、人を愛するかと思へば人を憎む、生命を要求するかと思ふと、生命を捨てる、笑ふかと思へば、泣く。喜ぶかと思へば悲しむ。飛び廻るかと思ふと、靜かに考へ込む。併しこれではよいのではないか。夏は水を好むが冬は嫌ふなど、などである。それが人間なのである。今、便所がよい所か。座敷がよい所か、と尋ねるならば、誰でも座敷がすきた、と云ふに違ひない。名香の薫じてゐる座敷と、黄金色の例の匂の充ちてゐる便所と、どちらがすきか位聞かなくとも分つて居さうなことを。併し私が便を催してゐて仕様のない時、又此の間が發せら

れる時は、便所がすぎた、と言ふであらう。人之を矛盾と駭ぐ。辻褄があはぬと責める。混沌と歎く。併し總ては、この人間性のあらはれではあるまいか。世の中の複雑な矛盾とかも、之に類することが多い。

抑人間性は等質性ではなく、異質性である。異質性であると共に滲透的である。異質的な意識の刹那刹那が、互に相滲透し、相交錯して、概念の型にはめて見ようとする矛盾だらけであらう。併し實は斯く滲透親交して、總ての異質も人間性として融合され統一されてゐるのである。多様な相が交錯して、一人の人間をなしてゐるのである。矛盾、不調和と見るのは、人間に眼覺めないからである。かのベルグソンは言つてゐる。「吾人の哲學は有機世界を渾然たる調和の一体として見做してゐる。勿論調和と言つても、それは決して在來の目的論者が要求する程に完全なものではなくして、寧ろ其の間に幾多の不調和を許し得る調和である」と。「不調和を許し得る調和」こそ生命ある人間なのである。そこに大きな調和統一のある人間がある。

されば「大人格は大なる矛盾を有す」と言つた人がある。之大人格には人間性の諸相が圓滿に具はり、時に従つて種々にあらはれる爲、論理の穴よりしか眺め得ない人には、矛盾不調和とも見えるのである。併し斯く矛盾不調和を許し得る調和としての人格、そこに偉大な生命があるのである。例へばソクラテスを見る。彼の逍遙として憂色なきを見て、人生の目的茲にあり、即ち快樂を得るにありとして、キレネ學派が起つたかと思ふと、又一方師が他面節制克己的なりしを見て、人の道は正に禁欲克己を以て世俗を超越するにありとしてキニツク學派起り、又師が善を説けるを見て宇宙の秘奥は善なりとしてメガラ學派が起つた。何れも師ソクラテスを祖述したのである。併しそのあるものは快樂主義になるかと思ふと、或者は禁欲主義を奉じ、

之こそ師の教と主張してゐる。そしてソクラテスの教を互に小さなものにしてゐる。だが畢竟快樂主義的でもあり、又禁欲主義的でもあつたのがソクラテスの大人格ではあるまいか。矛盾が統一されてゐる所が彼の大人格ではなかつたか。又釋尊に就て見てもさうである。その人格を傳ふるものに、眞言宗の如く密教を奉ずるものがあるかと思ふと、日蓮宗の如く口喧しいのがある、又禪宗の如く不立文字以心傳心で宇宙の秘法を悟るといふ難しいのがあるかと思ふと、淨土眞宗の如く唯南無阿彌陀佛を申せば済はれる、と言ふのもある。そしてどの宗の僧侶に言はしめても、その宗こそ釋尊の眞面目を傳へてゐるように言ふ。之釋尊は大矛盾を統一した大人格者であつたからである。慈悲を高調された釋尊が、妻子を愛なくして泣かしめたり、矛盾と言へば矛盾であらう。併し釋尊の人格を見つむれば、何等矛盾せず光を放つてゐる。大きく總てを包攝して流れてゐる。此處が彼の偉大な所であり、又我々が考へねばならぬ所である。

實際、人間は單純な器械ではない、種々の要求が交錯して一体をなしてゐる。其處には種々なる方面がある。そして以て生々流動してゐる。理知が不調和だと言つてみても、その不調和を含んで調和ある一体をなしてゐる。我々は理知の遊戲の捕虜とならず、理知の遊戲を捕へ指揮して、人間の生命を生きよう。矛盾不調和とかを含みつゝ、而も統一した人格として進まう。生きた世に光を求めつゝ、突進しよう。そこには眞人間が躍動する、豊かに而も力強く流るゝ大河としての人間が生れる。人間としての深く大きな生命がある。

要是我々が生きた人間である以上、生きた人間として進むことである。何と言つて見ても畢竟は人間である以上、其の人間である事實を忘れないで進むのである。人間の要求が多様な爲、人の爲し進む道も種々様々なるものがあらう。併しどの道にしても、同じく、人間の要求より生れたものであることを知りたい。例外なしに、人間的要求の埒内にあることを知りたい。そして此立場から、人間なる私は、總ての要求、總ての道を肯定したいのである。

併し又考へたいのは、我々は一人の人間である以上、總ての道を一緒に歩むことが出来ないことである。其處で自分の道を撰擇する。而も其の場合、私は大河の如く豊かにして力ある人間として突進したいのである。又洞穴を這つて行くような息苦しさを避けて、大地を打踏みつゝ前進したいのである。理知の規矩に捉はれた生活を去り、理知をひつさげつゝ人間性の大地に立つて生きたいのである。矛盾不調和をも許し得る統一でありたいのである。そして人間同志は共に人間として、御互に大きな了解を持ち合ひたいと思ふ。自分の現在歩む土地以外に土地らしい土地はないなどと考へて、狭量な錯覺に陥りたくない。文學家が政治家を罵倒したり、政治家が文學家を罵倒したりするのが其例の一つ。皆人間であり其の人間的要求に動いてゐるのである以上、小く其の一面的要求をのみ認める賢さを慎まう。それは水道鐵管の流れを知つた賢さかもしれぬが、全人間性の大河の流れを知らないものである。針穴的な一考へ方に過ぎないのである。皆で人間であることを自覺しつゝ、大きく自分の道を歩まう。

又似非自然主義的に衝動的な要求につれて浮草的な蠢動をすることは避けよう。矢張り人間である以上、其

處に價值の要求があつて、よりよきを求むるのだから。ミユンスターベルヒも言つた如く「價值の觀念により混沌たる要求の中に統一を生ぜしめ」大流が低きに向ふが如く、價值ある方へと進まう。よりよきを求めつゝ生きよう。而もその價值の根據は人間の要求中にあることを知り乍ら。そしてそこには人間の要求中より、溢れ出づる道徳が輝く、信仰が閃く。理想があり、計畫がある。靜思があり、活躍がある。斯くして味ひあり潤ひある人間として生きて行く。

そして最後にオイケンの次の言葉を味つて見よう。「人間は自然主義者の如く、自然の奴隸でも無ければ、知力主義者の見る如く、思考の奴隸でもない。人間の生活は人間のものである」鶯は鶯の聲で歌ひ、私は人間の聲で斯く語る。

x

x

x

x

あくびを一つ、先刻までゐた蠅の姿が見えない。星が二つやさしいまなざしで覗き込んでゐる。サラ／＼サラ、木の葉は散る。……電燈もついてゐる。擬今晚は活動寫眞でも見に行かうか。

少女・犬・人形

脇山康之助

表は吹雪かしら。それとも昨日の様につぶ雨がしつとり美しい人達を苦しめて居るのぢやないかしら。

たゞ緩かに漂つて居る異臭は、いでついた空氣の中で、ともすれば凝り固りさうだつた。前面の灰色の壁には氷つた水の滴れがもどかしさうに漂つて居た。

——氷柱が又増へたわ。丁度此れで三本よ。

美代はためらひ勝ちに呟いたが、直ぐ口を閉ぢた。

フェルト草履が心持ち快活に階段を降りて來た。

——暗いわネ。

貴婦人は常に美と夢とには著しく感情が濃やかである。

然し美代は美しい甘い香を貴婦人の胸の間に求めた。美代は着物に心を引かれなかつたが、美しい香に耐えなく興奮する年頃だつた。

——まあ。此の子は返事をしないよ。禮儀なんて少しも知らないのね。

——あの何んですの。

——知らない。サア——いくら。

——あとう五錢ですけれど……

貴婦人は苛々しながら十錢白銅を手渡して、でもつゝまじやかな迅速さで「有料便所」の扉を押した。

——キヤツ。

貴婦人は美代に取りすがる様に飛び退いた、うつとり心地好い接觸を感じた。可哀さうに美代は今迄抱かれた幸福さを知らなかつた。

——何んと心地好いのだらう。

——が次の瞬間ハツとした。

小さい禿げた牝犬が長い尻尾を振つて近寄つた。

——チロ。

チロは久し振りに示された寛容さにすっかり喜んで、いそぐと美代にすがつた。
——汚ない。

貴婦人はぬれた衣裳と不覺さを置き忘れる程愚鈍ではなかつた。

——チロ。

貴婦人が安全に姿を消すと、慌て、最一度牝犬を呼んだ。チロは伸々した世界を充分味あふ様に盛に鼻先をなめて居た。やがて何時もの習慣の様に、美代の傍の金箱の上に飛びのつた。

美代はデツと耳を澄ました。

チリン。チリン。

——十錢ぼつきしかないわ。

ひびいた金音に、僅かの金高を知つて悲しくなつた。

——チロ。

美代は本當に悲しくなつて、最一度かう呼びかけながら涙を落した。

——チロ。

美代はチク／＼痛む腹の飢餓を感じて此度は聲を出して泣き出した。

——何を泣くの。

そんな聲を求めながら泣きつづけた。

絹の手布は柔かい感じのするものである。それにふれる人の心は常に理性を失ふものぢやないかしら。

上層の電車置場には息附いた小鳥が眠つて居た。澄み切つた深海の様な空に、置場の掛時計が無氣味にひびいた。

その音を微かに聽いて美代は今迄眠つて居た事に氣附いた。

たゞ寒さのみがひし／＼と鋭く感じられた。

氣附いて見ると、チロは毛を失つた赤肌を苦しがつて鼻聲で泣きながら眠つて居た。

——チロ。

チロは悲しげにたたきの上に飛降りた。長い尾が空氣をはたく様に揺つた。腹部のたるみは飢餓を仰山に詰め込んで居た。

——あら。

美代はチロの坐つて居た跡に一圓紙幣を見出した。

——お金!! チロお金よ。

美代はチロを抱き上げて喜んだ。

——食べようね。行かう。

チロはひよろめきながら、躍り上つて居る美代の足元に怪訝さうに斜に圓周を巻き附けた。

美代は久振りに經驗する人間の世界に對する歡喜に胸を躍らせて居た。

人間は姿を見せなかつた。

その隣の果物屋は熟したボンタンを戸の外に置き忘れて眠つて居た。

花屋のヒヤシンスが温室から匂つて居た。

——チ口。聲を出しちや不可なくつてよ。

固まつた街路の上を歩き廻つて人間の居ない夜を経験したかつた。その爲に聞き慣れたチロの聲を恐れた。

手に握つた一圓札が汗ばむ迄かけ續けた。

ボンタンの香がなくなる迄走り續けた。

そして帽子屋のショーウィンドウの前に自分の姿を見出して立止つた。

—はあ—

何處もなく息の爲に曇つた硝子板を手で拭つて自分の姿を見附けて喜んだ。

—ばあ—

—お前は私よ。ばあ—

——お美代ちゃん。美代ちゃん。美ちゃん。矢張りお美代ちゃんがいゝわねエ。

——お美代ちゃん今日は。もう夜ね。だけどあたしには夜も晝もないのよ。あたしはたゞ電車の置場の地

下室。知つてる？　そこで便所の番人をしてるのよ。立派な人達がおあしを出して入る便所の番人よ。地

下室があたしの家つて譯。そしてチロがたつた一人のお友達。知つてゝ。

美代は始めて見た自分に話掛けて居る中に口にした言葉にチ口の事を思ひ出した。

一口。

一口。

レールの上を懸命に叫び聲は飛んで行つたが、空虚が長く尾をひいて戻つて來たのみだつた。

一口。

尙一層——力一杯に叫んだ。

チ口は姿を見せなかつた。

—うおん。

チロと異つたなき聲を聞いた。振り向くと大きな犬が、闇から生れたばかりの新鮮な姿を見せて居た。
——うおん。

ちぢれ毛を肩迄垂らした裸足の少女に怪訝さうに匂つた。

然し美代はその叫ぶ聲を隔しなく續いた夜の闇の中から叫ばれる様な、闇の脅かした唸りの様に考へた。

——チロ。

聲高くチロを求めた。

夜の犬は答へる様に首を高々とさしのべて吠へた。

——夜よ。夜だわ。

恐ろしいと思つた瞬間自分から離れて走り出して居た。

街角迄一散にかけた。然しパンの匂ひが美代の口邊にこびれつくともう一足も前に出なかつた。

——パン。

パンを考へたけれども、一瞬、夜が自分を食べようと思つてつい後迄押し迫つて居る事に氣附いた。強い不安から思はず振り返つた。

夜の犬は振り向いた異様の姿に驚いて、友を求めた。

けれどもそれは美代をおどろかすには充分だつた。

入口迄走りつづけてホツとした。

入口から顔を出して振り返つたけれども、何處にも夜の姿を見出さなかつた。

たゞ星が美しく光つて居た。

安心した。そして美代は星の瞬きをデツと見詰めた。

——星つて生きてるわ。星つて五錢玉だわ。でなきやあんなにバチ／＼光つたり消えたりなんかしないわ。きつと空ではお金がたんとおつこつて居て勝手に拾ふ事が出来るのよ。そして一つ拾ふ毎に、ぢきもう一つ新しい五錢玉が出来るのよ。

——好いなあ。五錢玉が一杯おつこつてゐるなんて。

美代は精一杯の空想をした。

パン屑で舗きつまつた空の道を五錢玉を拾ひながら歩いて居た。パン屑を頬張りながら五錢玉を一杯腰にぶらさげる。歩く毎にチリ／＼と涼しい音をたてる。

——どんなに好いだらう。

然し持ち切れなくなつたら如何しよう？

——さうだチロが居る——

突然チロを思ひ出した。

——チロ。

小さい聲で呼んで見た。

星が一つ流れた。素ばしこく――

頭上でバツと飛散るとそれが頭に飛び込んだ様に感じられた。星が自分を慰める爲に力に變化して頭に入つたのぢないかしらと考へた。

急に清々した様に感じた。「チロをさがさう」さう考へて出掛けやうとした。

一搖ぎの風が地上を掃きながら美代の頭上をかすめた。冷い風だつたのでぞつとした。

――夜が追駈けて來た。

わくく胸をふくませながら、チロと星と清々した氣持を地上に置き忘れたまゝ、駈け降りた。

相不變冷い漠然とした空間^{あきま}だつた。階段を降り切つて桃色のガラス戸の前に立つた。

桃色のガラス戸を通して夢の様な甘い香袋が――貴婦人と紳士達の置き忘れた香がうつとり空間^{あきま}を漂つて居た。

句の間に生きて來たのだつた。

句ひの中から生れて來たのだ。

美代は黒ずんだ褥をガラス戸の傍に求めた。たつた一つ河べりに臨んだ小さい切窓からは夜がのぞき込んで居た。

美代は未だ胸をわくくさせながら、怖ろしさの餘りぼろ切を被つてベンチにつゝ伏した。

冷え切つた裸足がづきんゝと血を通はせた。冷さが血の循環に伴はれて頭の中に迄走つて來た。

――星が入つてゐるから大丈夫。

さう考へながらもちぢれ毛の頭を注意深く両手で包んだ。

――まあ――

このかめに觸れた手は恐ろしさにふるゝ震へて居た。冷さが食ひつかれた時の様な痛さを感じさせた。

――夜が來たのだわ。

美代は夜が忍びやかに、冷たいこゝへた手足をもうつゝみ込んだ様に思はれた。

ぼろ切れで顔を包んでさめゝと泣き始めた。

――死ぬのだけ。きつと死ぬのよ。

さう感じて美代は涙を口に飲み込みながら臨終に飛散るさうな靈の蒼白い散光を待ちこがれた。

――死ぬのよ。

泣いて居る中に又チロの事を思ひ出した。

――チロ。

――チロ。

切れる様な微かな力弱い聲で二度ばかり空虚に呼び掛けて見た。

と思ひ掛けなくペンチの下からチロの此れも力弱い返事が洩れてきた。

——チロ。

確かめる様に最一度呼んだ。今度は明瞭に應答された。

美代は夜の恐ろしさを忘れて飛び降りた。

ペンチの下にチロは長い尾をふりながら、彼女の方をながし眼にながめた。

チロの短い前足に白い物を見出した。

——チロ。それ何なの？

——チロ。持つてらしゃい。

チロはおとなしく白い塊を啣へて力なく出て來た。

——お人形ぢやないの。

美代の様にちぎれた赤毛の西洋人形の土ついた頭が胴体を失つて居た。

——まあ可愛い、。

美代はしつかり握りしめては、すりした。

——何んて云ふ名？ お前チロの子供？

——よるつて名？

——嬢だわ。そんな名ぢやない事ね。

——お花。お定。千代。豆子。

それ以上の名前を知らなかつた。

——お花。

もう一度繰り返してから、人形の名前をお花とさめた。

——お花。

——お花。

美代はお花をしつかと胸に抱いて小さい空間を歩き廻つた。チロは義務的に眼を閉ぢて美代の後を追つた。

——お花。

お花を慰さめる子守唄を考へた。然し可哀さうに何んな簡単な子守唄さへ知らなかつた。

——ねん／＼よ。

でも首だけのお花は素直に美代の胸に抱かれたまゝ満足して居た。

——さう／＼またパンがあつたわ。御馳走するわ。

いそ／＼と褥の裏をたづねた。一寸位の堅いパン皮が美代の掌に握られて居た。

——これお花。これはあたし。

美代は半分にひきちぎつたパンの皮を食べ様とした。チロは鼻をクンと鳴らして、分け前を欲しがつた。
で美代は自分の食ひ分を減らさなければならなかつた。

外は粉雪らしい。しんく〜と更けた街の底は痛い程静かだった。涙さへ大きい轟の様に思はれた。
——寒い。

美代は吹雪を感じて身震ひした。ぼろ褥をまとひながらお花の失はれた胴体に氣附いた。

——まあ。寒いでせう。よく辛棒したわね。

美代はお花を暖めてやるべき衣をさがした。

然し蒼白い室間には、美代の眠るペンチとぼろ切れとそして金箱が一樣に寒さと夜を恐れて居るのみだった。

美代は最初ぼろ切れでお花の着物をこさへやうと思つた。然しそれをお花にまとひながら、

——そしたらあたしはこゝへ死んぢまふわ。

と呟いてあきらめた。

方々をさがした。隅々を尋ねた。

幸ひだ。美代はペンチの下に先刻の一圓紙幣を見出した。丁度格恰だった。

——これで好いわ。

美代は紙幣をお花の首に巻きつけてほつとした。たつた一人の友人をはらく〜する危険から救ひ出した程に安堵した。

——ねんく〜よ。

空間を一周してペンチの上に登つた。母らしくお花を抱へて横はつた。

——ねんねするのよ。

チロは枕元に首をうなだれて眠つた。

お花は吹雪の様に黙つて美代の胸に横たはつて居た。

そして美代は、子守唄を呟きながら次第に眠つて行つた。

一樣に眠りが冷さの間から無心な顔を三つ打拂つた。

眠りながら美代は考へた。

——お花は何處から生れたの？

——夜からかしら？

——いやだ。いやだ。夜つて恐い大きな大よ。お花は行愛い色の白いあたしの子供。

あたしの子。夜の子ぢやないのよ。——あたしの子。

——だけごひよつとしたらお星様の子供かも知れないわ。

——さうよ。さうよ。きつとお星様の子供よ。キラ〜とお星様は美しく光つてらつした。丁度お花の額の様よ。

——さうよ。きつとお星様の子供。あの流れ星があたしの頭に入つてきた時にきつと生れたのよ。

そして美代は満足してお花を抱かうとした。けれどたゞ空虚を——冷へ切つた夜を抱いたのみだつた。何故ならお花は星の子供だもの。曉方に明日の夜を戀しながら、太陽の力強さを恐れて姿をかくすしとやかな星の子だもの。

お花はおそろしい夜の子ぢやなかつた。

それと同様に星の子であるか何うか知らない。

がお花は寢返つた美代の身体の爲にペンチの下、チロの足元に、生れたばかりの身体に一圓紙幣を巻き附けたまゝ、轉がつて居た。

——一四・一一・二〇——

雪 降 る 日

星 野 明

民也が目を醒したのはもうかれこれ十時近くであつた。

ことごと、下の臺所で火を起してゐるらしい瀧子の動作や聲音が彼の寢てゐる二階まで厭な響を立てゝゐた。そして時々瀧子の歩む都度に起る床板のきしむ音が妙に寢醒の彼にはこたはつた昂奮を與へた。彼は昨夜の煩悶を復思つた。

彼は起きて見やうかしらと獨語して見たがそれも壁と壁との隙間から忍び込んでくる冷い針の様な風に急に憶劫になつて了つて、例の様に枕元から煙草を拾つてこれに火を點けた。布團の中で煙草をふかすことは昔からの彼の癖であつた。

戸外は相變らず今朝も雪降りの模様だつた。

民也は煮しめた穢い六疊の此の室を今更珍らしげに觀察を初めた。愛想ばかりの粗末な壁、而も以前こゝ

に住んで居た人達は如何にも亂暴なことをする人達と見えて、この壁には太い爪の痕が幾條にも残されてゐた。目立つてひどい箇所は新聞などで貼り隠されてゐたがそれとても黄くにちんだものを不體裁に貼附けたばかりだつた。そればかりではない、風が吹けばめくれさうな薄い天井板、黒く煤けた障子や襖……一つとして碌なものはない。彼は悲しいと云ふよりも可笑しかつた。

だがたゞ一つ此の室で彼の誇りとされたものは、此の室にとつては頗るの不似合な少女の可なり大それた裸体畫であつた。勿論現在の彼には決して會心の作ではない。だけども民也が美術學校時代に書き上げた最大努力の現はれとして、實際又彼はあの時分藝術に對して火の様な熱心さと意氣とがあつたのではあるが、それを想ひ出させるに此の上もない保存物であつた。と同時に一生忘れることの出来ない現在の彼の内縁の妻瀧子、いや戀人と云つた方がより美しく聞えるが、その女の四年も以前の裸体畫であつた。

民也は學生時代を想起した時よくこの畫を眺めた。而して自分の父の無理解を思つてはよく泣かされた。民也が今かうした穢いせまくるしい部屋に其の日其の日の生活を立て、ゆかなければならなかつたのは、勿論自己の極端な自由思想からではあつたけれど、それにしても餘りに頑固で、わからずやの父を怒らすには居れなかつた。

民也は別に起きやうともせず、二本目の煙草に火を點けた。そしてぼんやりと考へに耽つた。今朝は妙に胃が張つてゐてもつとも食欲が出なかつた。ものうげな足取りで瀧子は二階へ上つて來た。瀧子は「お目醒め！」と障子の外で聲を掛けて這入つた。

「今日はひどく雪が降つてゐるわ。でももう一度Kさんにお頼みして見たらどう？ 親しい間柄なんですもの……。瀧子は彼に可愛い微笑を見せたが、倦怠さうに煙に包まれた布團の縁に身を屈めた。身持のせいだとも思へた。

Kさんとは民也の少年頃からの親友で、現在立派な醫者になりすましてゐるが、何かにつけて親切に民也の爲めには面倒を見てやつてゐた。民也もKさんには瀧子との關係に就いて凡てを打明けて相談した。而して民也はKさんを仲に入れて、兩親に對して子としての今迄の不孝を詫び、且つ再び我が家に復歸させて貰ひ度いと申込んだのであつた。併しKさんだけではうまく行けさうにもない話だつた。兩親の心は動かかなかつた。

民也は直ぐに何とも返事をしなかつた。突然にこんな話題を瀧子から持ち出されたことはちよつと不愉快な氣がされた。併し瀧子に見れば無理からぬことだつた。何等生活に安定もなく、而して民也が實家は同じ此の町の遠くにもない所にあつたにも拘らず、大きい腹をかへて世間を憚らなければならぬ瀧子には可愛想なことだ位は民也もよく解つてゐた。

「なんならあたし、これからKさんに電話を掛けて参りませうかしら。」

「どうせなくなつたつてい、さ。俺は自分で行つてこやう。昨夜俺はさう決心したのだ。矢張自分で作つたことは自分で解決して來なければ駄目だよ。ねえ……」民也はかう落付いて云つた。而して目を開けたり、

閉ぢたり、もち／＼しながら全然眠りから醒めて居ないと云ふ様な様子をして見せた。

民也は獨語の様に、

「男が生れるといゝがね。」と云つた。

「本當にね。あたしだつてさう思つてよ。どんな解らない親達でも初孫の顔を見れば心が自然と和むと云ふのですものね。それがどうも打勝てない人間の情なのでせうね……。」瀧子はわざと軽く腹に手をあて、みた。民也は笑つた。瀧子もつゝいて笑つた。

だがKさんの此の前の話では、民也の様な不孝な者は絶対に自家へは入れられませんか云つて泣いて居たと云ふことを想ひ出して、又しても彼の心持は暗くなつて了つた。

民也は再び隅の裸体畫に眼をやつた。而して云つた。

「ねえ。あの頃の僕等にもう一遍戻つて見たい氣がするよ。」

「私もね……。」瀧子は昔の自分の裸像に視線を向けながら心持ちはにかんだ微笑を洩して答へた。

もうざつと四年越にもなる……。民也が美術學校時代、北海道の果のあるさびれた港の町へ旅行に出掛けたことがあつた。瀧子に識り合ふ様になつたのも實にこのさみしい町の出來事である。其の頃、瀧子は未だ十六を過ぎたばかりだつたが、濱育ちにも似ず華奢な女で、全体としてはどんなに慾目に見ても美人とは云へ

ないがたゞ蠱惑的な澄んだ大きい瞳が瀧子にとつて美の特異だと云へば云へた。だがかうした女、而もアイヌ人との混血兒である彼女を、男として決して引目を感じない民也がどうして激しく愛する様になつたか、しかもどうして東京迄連れて來る氣になつたか、これには彼の學友達も等しく驚かされた事柄であつた。

でも二人はうまく東京で一年間ばかり自家の仕送を受けて生活をして行つた。けれども秘密は決してわからずには濟まなかつた。民也の両親は極度に憤慨した。それつ切り學費も來なくなつて了つた。愈々民也が學校を退學せねばならなくなつた時、氣の弱い二人は泣きつゝけた。民也は雜誌社へ勤めたり、會社へ傭はれたりして働いた。其の後彼は瀧子を連れて生れ故郷へ戻つて來た。そして確な口が見つかると迄低級な雜誌の口繪など書いて其の日暮を續けて居たのだつた。勿論両親の住家は近くにはあつただけだ此の事件以來勘當同様な關係になつてゐたのである。

彼は瀧子の世話で銘仙の着物に着替ると襟巻で顔深く包み込んで朝飯も食べずに戸外へ出た。矢張瀧子の云つた通り酷い雪だつた。彼は誰にも開けられてゐない、随分長つたらしい雪の路次を通つて、電車通まで出てくるのに並以上の苦勞が要つた。がそれのみか彼が乗らうとした電車は彼方にも一つ、此方にも一つと云ふ風に立往生の光景で待つて居てちよつとも動きさうにもなかつた。彼は思はず不愉快な舌打をやつて黙つて歩き續けた。

兩親の家は決して遠いと云ふ程でもないが彼が色々の事を考へたり、思ひ出したりして歩いてゐると、案外家に行き着くまで暇がとれた。

民也は母親との對面が今年で四年目にもなるのだと思ふとその會ふことが恐い様な、不安な様な、或は苦しい様な、だが嬉しい様な複雑な氣持に捉はれた。

民也は家に這入るのが何だか心が引けた。併し思切つて顔を合せて了つた時かうした今迄の氣持は全くとれて了つた。母親は喜んだ。そして何より彼に嬉しかつたことは想像してゐたより凡て元氣で居て呉れたことだつた。Kさんが行つて話して呉れた時とは丸でうつて變つた態度だつた。まあよかつたと民也は心の中と思つた。

彼と母親とは茶の間の長火鉢を間にして坐つた。暫くはどちらからも話が出なかつた。母親は吾が子の顔をつく／＼眺めてゐた。が暫くしてかう云つて口を切つた。

「民也も随分變つたのだね。さう／＼あれからもう四年も經つたのだから。お母さんも、でも同じことだらうが……。お母さんはね、髪を梳く毎に白く短くなつてゆく自分の髪の色を見ては、いつも寂しく心でお前の事を思ふてゐた。この間もKさんがいらつした時もこんな愚痴を云つて泣いたのぢやが……。」と母親は又しても涙を流した。民也は氣強くそれに負けまいとして堪へて見たがもう母親の顔を見返すことさへ能きない程彼も悲しくなつてゐた。そして急に鼻つ柱がピンと痛んできた。と思ふと忽ち彼の頬を涙がつたつて出た。幼い時民也はよく母の涙を見た。だがそれは母親が悲しいから涙を出してゐるのか如何うか其の頃の彼には

見當がつかなかつた。

母親は茶をついで猫板に置いた。

「でもお母さんは僕が思つてゐたよりずっと元氣だつたのが嬉しい。」と民也はやつとこれだけ云つて顔を上げた。

「お前は何か食べるかえ。」母親は訊ねた。

「えゝ。何でも、あればね。」と彼は答へた。

「羊羹でも注文して上げやうかな……。」と云つて母親は茶の間を立つて電話室へ行かうとした。

「ぢや、蕎麥でも注文してね、お母さん。」と民也は云つた。

「どうして？」と母親は問返した。民也は朝飯を食べずに來たことを云ふと母親は笑つた。

電話室から戻つて來ると母親は色々な世間話を本當の打解けた口調で話し出した。四年間も音信が絶えてゐたのだから母親にとつても云ひ度い事が山程あつた。中でも出入の仙吉が、民也とはおない年であつたが、先頃嫁を迎へたこの話は一番笑はせた。お人好しだが間の抜けた貧乏な男、仙吉にどんな氣で女がやつて來たのか、どうしてもたゞの女ではないと思つた。

「あのそれなんか云ふ節、さうさう出雲節をね、嫁から習つたと云つてね、庭の雪除けをやりながら夢中になつて稽古してるのや。それがね吹き出さずにはおれない程變挺な節廻だね。昨日の話では嬢があつては飯も食つて行けないから北海道へでも出稼に行きめすと自慢らしい事を云つてゐるのよ。」と母親は云つた。

「凍えに行きめすだらうよね。」と彼は皮肉つた。

注文の蕎麥が來た爲めに仙吉の噂も途切れた。暫くは沈黙が続いた。民也は蕎麥を食つた。母親は所在なさに黙つたまゝ、火箸で灰をいぢつて、俯向いてゐるが思出した様に顔を上げて、

「お前の云ふ女つて北海道の何處だつたのやね。」と訊ねた。民也の胸は突然ドキンと打つた。「Kさんに聞いてもはつきり云つて呉れないので……。」かう云つた母親の面も彼の思ひなしかはてつて見えた。

「すつと寂しい△△なのです。」

「札幌からどの位ある町？」

「さあ。ざつと汽車で一日もかゝる處ですよ。」と民也は心配相に答へた。母親は少し驚いた様な、不快な表情をした。彼には此がつかつた。

「お前がね、東京からの手紙で北海道へ行き度いと云つて來た時お母さんは絶対に不賛成だつたのや。だけれどお父さんが藝術の爲めだから、又民也の進歩の爲めだからつて餘り云ふものですから許して上げたの……。あの時……行かしてなかつたつたらこんな悲しいことになりはせなんだのに……。」と母親の言葉は段段切れ切れに然も沈んだ調子になつてきた。

「え、……。」と彼は黙頭いたまゝだつた。母親はそつと袖から布切を出して涙をふいた。

「でもお母さんの想像して居られる様なつまらない女では決してないのですから……。」

「何處の馬の骨とも分らない女が……。」と母は云つた。彼はむきな氣持を受けた。だが瀧子が實際アイヌの系統を引いてゐる以上一言も云へはしなかつた。勿論Kさんにでもこれだけはおくびにも出さなかつたのだつた。

「心から愛する女をかりに捨てたとしてそれが僕にどんな利益があるでせうか。たゞ一生癒されない心の傷だけが深く残るでせうよ。僕はそれが悲しいのです……。」彼はたう／＼泣き出してつた。

「それがお前の勝手な言種いひぐさですよ、考へて御覽。」と誠める様に母親は云つた。が母親も直ぐ思返した様に、「Kさんの話では子供も出來ると云ふのだし、みじめな世帯だとも聞いてゐるから、何とかしてやり度いとは思ひながら、今度はお父さんが斷然承知して呉れないのですから……でもお父さんの御機嫌のいゝ時に聞いてあげるからそれまで待つておいで。」と母親は云つたが情に脆い民也はかうした優しい母の情に一も二もなく參つて了つた。そして感謝の涙がはら／＼とこぼれた。

中學校に行つて居る次男の慶次が其の時歸つて來た。づか／＼と茶の間へ這入つてきた時彼は兄の民也が居たのに驚きはしたが溫和しく「お歸りなさい。」と云つた。そして慶次は茶の間から出て行つた。民也は弟の心を嬉しく思つた。慶次は兄のことをよく知つて居た。又瀧子をも、時には兩親にかくれて尋ねて行つたことがあつたから、知つてゐた。慶次の聲音が茶の間から消えると母親は、

「どうして、お前はあの女を東京へ連れて行くことが出來たの。」と聞いた。

「兩親ふたおやのない娘だつたからです。幼い時死別してつたのださうです。僕が會つた時はたゞ一人の伯母に頼

つてゐた時でした。」

「伯母さんて何をしてゐる人だった？」と母親は眞面目に然も優しく訊ねた。

「小さい商賣をね。なんの店だったけな。」と彼は小顎をかしげた。

「うーむ。」と母親は聞かない中に獨語の様に呟いた。

「そしてあの女の年は？」と云つた。

「瀧子のことですか。え、瀧子は二十ですよ。」と云つて彼は寂しく笑つた。併し母親はどこまでも訊ねて見たさうに見えた。民也にはそれが不思議だった。

座敷の屋根に積つた雪がどざくどざくと激しい、急躁な音を立て、なだれ落ちるのを聞いた。民也は妙に、母親の暗い気分と對照して息づまつた氣持を感じた。がそれが又氣持よくも感ぜられた。そして自然と次に起る雪崩の音を聞かうとして待つた。

「随分積つたのだらうよね。今年は珍しい雪降りだ……」と母親はどこともなしに障子越しに見やうとした。そして思出した様に言葉をばづませて云つた。

「お前だから云ふがね……お前には腹異の妹が一人あるのですよ。」母親の言葉は急に喉で消えて了つた。

「え、何處にですか。お母さん。」さすがに民雄も驚いた。

「北海道に……。憶えてかい、昔お千代と云ふ氣の利いた下女が居たのを。あれの子供ですよ。もうさうね、瀧子位になつて居る筈です。お父さんは今でもお母さんには内證で金を送つてゐるらしいのですが、お

父さんも善い人だから籍を入れてやつて呉れとは云へないのでせうね。それにお母さんもこんな頑固者なんですから……。母親はさみしい微笑を洩した。

「北海道の何處でせうね。」民也は臍氣にお千代の居たことを想ひ出すことが出来た。

「どの邊にか。お母さんも聞いて見たことはないしね。お千代は結婚してともかく幸福にやつてゐるが、あの子がいとほしいでせう。北海道の叔母の家に厄介になつてゐるのですからね。此の間もKさんに聞いたままお前達の家近くまで行つて見たが、瀧子に會つてやるのが何だかあの子にでも會ひに行く様な恐い、氣まづい心になつてね、どうしても這入れずに歸つて了つたのよ。」

「よくあの家が分りましたね。」と民雄はわざと話題をそらして笑つた。

「なんばで借りてゐる？」

「六圓です。二階だけですからね。飯を焚いたりするのは勿論下の台所なんです。雑誌の口繪なんか書いて生きてゐます。でもKさんの御世話で近い内に新聞社へ勤める様になつてゐます……。」

「え、どう……。」と母親は喜んで呉れた。勘當しても可愛いの吾子だと民也は心に思つた。と同時に彼が今の今迄、母親のことなんかで考へなかつた振舞を多少恥入つた。それがちぐはぐな氣持を彼の心に感ぜさせた。民也は手持無沙汰に時計を出して見た。もう暫くすれば、父親が勤先から歸る時刻にまで廻つてゐた。民也は雪降る道を再び歸るのがつらかつた。かうして暖い部屋にまた坐つて居たかつた。だが一方母親のかうした好意ある愛情を少しでも早く瀧子に知らせてやりたい氣持があつたし、又父親の留守中に、

許可もない自分が長居することは却つてよくないと思つた。母親も今日だけは父に會はぬ方がいゝだらうと云つた。

「お母さん。ちや失禮します。」と民也は心持頭をさげて立上つた。

「ぢや、歸るかえ。お母さんはうまくお父さんにさう願ひして上げるから……。」と母親は云つた。

「何か瀧子に持つて行つてやればいゝのだが……それは慶次にでも持たしてやらう。」さう云ひ足して母親は民也の出る後姿を元氣よく玄關で見送つた。

大きい重つたるい雪片が濁つた空の中心から靜かに街路の上にも、屋根の上にも、人々の傘の上にも降つてゐた。今は民也の心もこの雪の様にしつとりと落付いた氣持で瀧子の家へ足を運ばせることができた。彼の胸はただ喜びで一ぱいだつた。

「お千代?……。」民也は再び先刻の追憶を途々心に描き出してみた。「昔、自分が近所の子供につれられて、恐ろしい稻荷山へ遊びに行つた時、家では非常に心配して、自分を探しに下女が來て呉れた。そして小さい私が山の細路をつたつて下りてくるのを見付けた時、下女は元氣のなかつた顔から忽ち元氣づいて私を力一ぱい抱きしめて涙をにじませてゐた……あれがお千代だつたのかしら……。」彼は心に描き心に訊ねて見た。「そして其の千代の生んだ子が又自分の一人の妹になつてゐるのだ……幼い頃よく見上げた母の涙も確かお千代のために流してゐたのではなかつたらうか……世の中は……世の中は……。」民也はこゝまで夢の様

な回想を追ひつめてくると、ひとりでにどん底へでも近づいてゆく様な氣がした。

民也は思はず空を見た。

靜かに靜かに雪が降つてゐた。

海 邊

加 藤 一 雄

風が雲を吹いてゐる。
 私が海邊に立つ。
 海は膨れてゐる。
 潮が流れてゐる。
 遠くで海と空とが接してゐる。
 そのづつと遠くに、千里も萬里も遠くに、
 又た大きな陸がある。
 陸には山があり
 山には雪が積つてゐる。
 山の麓には町がある。
 その町にお前は住んでゐる。

今お前は眠つてゐる。
 町を夜が被ふてゐる。
 その夜が海を越へてくる。
 この海岸に進んでくる。
 この海岸は今晝である。
 づつと沖には夕方がある。
 更に沖には夜がある。
 その向ふには朝が光つてゐる。
 私の海岸に夜が來た頃
 お前の町には朝が來る。
 お前が眼を醒す時に
 私は寐なければいけない。
 お前が笑つたり話したりしてゐるとき
 私は何も知らずに寐てゐる。
 いま、夜が海をこへてゐる。
 私とお前との間を暗い夜が進んでくる。

辻

私は壁に凭れる。

壁は高く壁はあの辻まで續いてゐる。

こゝは大都會の淋しい通りだ。

そしてお前もこの都會の何處かに住んでゐる。

そこでお前は御飯をたべ

お前は話をしてゐる。

それに私は疲れて了ひ

たつた一人のお前を捜しあぐんでゐる。

この兇暴な都會の中で

私がゆくりなくもお前に逢ふのは

こんな通りではなからうか。

壁の續いた、木犀の香りのたかい
こんな通りではなからうか。

あゝフトあの辻を曲つてお前がやつて來て

「今日」はと挨拶するではなからうか。

あの辻を曲れば電車が走つてゐる。

そこではもう

私は永久にお前に逢ふことが出來ない。

私は壁に凭れてゐる。

お前はあの辻を曲つてこないか。

ほんとにフトお前はあの辻を曲つてこないかしら。

伊太利皇太后

脇山康之助

テリヤを一匹銀鎖で結び
 彼女は ローマの河邊りを散歩する。
 鋪石に 破れた靴を見出した。
 街燈の下の白い花は晝ながら見事にはつきりして居ると
 その後、河水のごよみに靜かに投げ込んだ。
 春らしいごよめきに テリヤが耳を澄ます。
 と 金色の鈴が首の邊りに 鳴る。
 右の手のマガホニーのステッキを上げて
 小さい踵の足跡を トンと叩くと
 皇后が 陛下と向ふ岸に話し合つて居る。

公園

亦ナボリの船歌が 面紗の隙間に轟いてくる。
 胸が微かに痛い。
 彼女 皇太后は 小聲にホフマンの船歌を誦さむ。
 ふと氣附けば ダイヤの首飾を思ひ切り握り締めて居た。
 紙煙草を喰へた西洋人が
 刻明に靴下を編んで居ると
 公園の人々は 彼を見詰めた。
 大分長い絹糸で彼は時々微笑みながら
 編針を動かした。
 然も時々 思ひ懸けない方向から
 小さい西洋の子供が三輪車を驅つて

彼の前に「うおつ」と呼んで通り過ぎる度毎に
彼は面を上げて大聲に答へた。
冬だけでも 暖かだし
斑らに草が延びて居た。
で彼の心は編み上げた靴下に
しつくり嵌つた靴下留を考へた。

—十五年二月—

たそがれ

太田 辰夫 譯

灰白い磯邊で
心もちちに、私はさびしく坐つてゐた。
陽がぐんぐん沈むと、茜色が水の面に帯をひいてゐた。
はるかな白浪は、潮におされおされ
岸をめがけて泡立ちざわめいた——
妙なもののさわがしさだつた
聲をひそめてゐるやうで、ふえの音色ともきかれた。
笑聲がきこえ、なきごどがきこえて
ためいきかと思ふと
たちまち叫んでゐるやうでもあつた。
それにまじつて、私は今しがた

故郷の子守唄を――

その古のやさしい傳へばなしをきいたやうに思つた。
私がまだほんのこどもの時で、

夏の晩方

静かにおはなししあふため入口の階にしやがんで、
小さな心をすまし、物珍らしさに目をかゞやかせて
私たちはその話をきいてゐた。

でも、大きな女の子たちは

花瓶に近い窓ぎしに坐つてゐた。

ほんのりしため頬が

ちよつと笑をふくんで

そこへ月が照つてゐた。

化 鳥

一羽の鳥が西からとんできて
東へ東へ

あづまの郷の園に飛んでゆく

園は香料の茂みに香をただよはし

棕櫚は風に葉鳴りをさせその下に泉が冷えきつてゐる――
すると化鳥はとびながらうたつてゐる

むすめの方からうちこんだ、むすめの方からうちこんだ

むすめが男の悌を小さい心にひめてゐる

うれしくこつそりひめられる、

がむすめはそれをしらないだ。

しかし男の夢を見た

心の中で手をあはせなきついた時その唇が

男のうでとふれあつた。

こんどは名前をよんでみる、

よんでむすめは目がさめた

びつくりしたやうな貌をして、

びつくりしながら美しいうるんだ目をこすつた。
むすめの方からうちこんだ、むすめの方からうちこんだ。

檣にもたれて私は上甲板から
鳥のうたをきいてゐた。
白くちぢれた浪がしらが、
銀のたてがみをなびかして
萌葱の駒のやうにおどつた。
まばゆいばかりの白帆をはつた
ヘルゴランド人たちの小舟が
白鳥の列をなして浪をきつた
太つばらな北海遊牧民のヘルゴラン人たち。
頭の上の果^{はた}もしれぬ蒼さのなかに
白雲が漂々としてゐた。
相かはらず太陽が輝いてゐた

穹窿^{てん}でひらいたこのもえたつばらは
こころゆくばかり海^{うみ}にうつつてゐた。
さて
空と海とこの胸が
節をあはせてゐるのだ、

むすめの方からほれこんだ、むすめの方からほれこんだ。

(ハイネ・のどぜえより二篇)

ぶらんこ

加藤 一雄

時。現代。秋の夕方。

人物。

敬助。康吉。みづ子。

舞台。

略々中央に白い鞆轡がたれてゐる。稍々左手寄りに數本の梧桐。此處はベンチのある丘上である。樹間から遠景に光つた海が見える。晴れた秋の午後。

幕ひらく

みづ子はベンチに腰かけて居る。康吉は煙草をくわへて一本の梧桐を見上げてゐる。枝の上に敬助が坐つて

ゐるのである。彼はそこでバナ、を喰つて居る。

康吉。おい。こら猿。一寸。

敬助。黙つてゐろ。康吉。巴里の風東京の風。巴里の風東京の風。何處へ手紙を出さうやら。

康吉。何だい其は？

敬助。詩を朗吟してゐるんだよ。海がよく光つて見えるなあ。風は眞直俺の顔に進軍して来る。巴里の風東京の風「ト云ひかけて急に海を指す」おい汽船が見えるぞ。こら康吉。や日章旗が翻つてら。

康吉。そりや汽船も通るだらうさ。海だからな。

敬助。馬鹿。勿論唯の汽船ならわざく紹介しやしない。所が素敵なんだ。おいそちらのみづ公。佛蘭西行きたぜ。やあ島にかくれる。早くこゝに上つて来いよ。

みづ子。「立上る」別に汽船なんか見たかないわ。けどほんと？

敬助。アハ、。尻を上げやがつた。愉快々々。莫迦だなあ貴様は。佛蘭西行きだなんてどうしてこゝに居て分るもんか。只汚い内海航路だい。威張ても矢張り早く佛蘭西に行きたいんだらう。アハ、。か、つたな。内海航路だい。口惜しいか。

みづ子。「黙つてベンチに坐る」悪戯つ子。

康吉。こら敬助。降りて来い。みづちゃんをからかうと承知せんぞ。いゝか。巴里の客舎にあつて窓に倚つ

て空を眺めてゐるみづちやんの夫君たるべき人を想つてみる。みづちやんにしてみりや佛蘭西のフの字をきいても心が踊るのは當り前だ。其を何者だ汽船にかこつけて樹上から揶揄するとは。早く降りて来い。

敬助。誰も揶揄しちや居らんさ。分つたか。みづ公なんか早く巴里へお嫁にゆく方が良いと思つてゐるだけさ。シャンゼリゼイなんかみづ公とビールダルどが腕を組んで歩くのに丁度いゝ所だ。そんな奴等にお江戸の日本橋を歩かすのは惜しい程だ。ヤイみづ公。早く巴里へ行け行け。そして行つたらもう二度と歸つて来るな。

みづ子。歸るなつて云ふの。

敬助。さうさ。歸るなつてよ。

みづ子。そりや無理だワ。

敬助。無理ぢやない。

みづ子。無理だワ。妾だつて櫻をみるにつけきつと御國が戀しくなると思ふの。分るでせう。それに妾達三人はもう之で一生二度と遊ばない積り？ エッ敬ちやん。妾が奥さんになつたからつて遊ばないのは卑怯だワ。女々しいワ。さうぢやなくつて？

敬助。……。

みづ子。いゝぢやありませんか。妾時々日本に歸つて来るワ。そしてあちらの話をしたり又一緒に散歩し

たりしたいワ。妾きつと今と同じ氣持ちで楽しく遊ぶことが出来ると思ふの。

康吉。同感。流石はみづちやん康吉の友達だ。一緒に散歩しようなんて素敵だナ。なあおい。

敬助。何が素敵だ。

康吉。アハ、ゝ。そんな奴は默殺するとしてなあみづちやん巴里仕立の洋装をしろよ。颯爽僕の如き男子と銀座を散歩して日本の奴等を見返してやらうぢやないか。やい敬助。其時に後悔するな。

敬助。馬鹿野郎。そんな世紀末のリアリズムは已に古いぞ。いゝか。少年の日の思ひ出の美しいのは其が幻であつてこそだ。其はうす暗い記憶の彼方に明滅し乍ら少年の目がすぎてからの長い々々月日を俺達の胸に棲んでゐるのだ。兇惡な都會にあつて日々の生活に追はれる時になつてもこの幻さへ呼べば俺達は再びみづ公と共に蜻蛉を釣り鞠を遊び又縄飛びをした少年の日に返ることが出来るのだ。其を何事だ。此の哀切極りなき幻を破らうとする奴は。

康吉。敢て云ふ。俺だ。

敬助。こら康吉。第一貴様は散歩々々と云ふが今度歸つてくるみづ公は已に人の細君だぞ。又其次に歸つてくる時は數人の母となつてゐるぞ。又其次の時は已に初孫を思ふ老人だぞ。又其次には。やい康吉こんなみづ公の姿が見るに忍びるか。想像してさへ悲しい位だ。一体何處に美しさがあるんだ。

俺はそのお下げに結んで藤棚の下に立てるみづ公をこそ得たいのだ。俺は現實のみづ公を敢て得ようとは思はぬ。やいこらみづ公。貴様も枯木の如き一學究の徒に代ふるに潑刺たる紅顔の美少年を以て

したいなら今の内によく俺の顔を覚えておいてもう二度と歸つてくるな。さあどうだ。

みづ子。「かぶり振る。」いやだワ。

敬助。なんだと。

みづ子。妾いや。歸つて來ますワ。でも三人で遊びたいもの。

敬助。俺は遊ばん。

康吉。例外。みづちゃん。俺は遊ぶよ。

みづ子。えゝゝ。どうしても敬ちゃんも遊ばせて見せるワ。妾遠い所に居て幻なんか抱いて暮しちや行けないワ。

敬助。ほんとうの純真な少女は何か幻を抱いてゐるものだ。

みづ子。妾はいや。巴里の廣場で噴水の沫に泣いてゐるより妾日本に歸つてくるワ。

康吉。同感だ。こう敬助。そんな、アお前の輕蔑する詩人の抱く考へだぞ。俺達は勇敢なエビキニウリアン

だ。窓の蒼空に儂い少女の幻を描くよりも横濱埠頭に再びみづちゃんの姿をみる日を想へ。

敬助。糞。なアまいきな。法科の奴は黙つてろ。サアみづ公。二度と歸るか歸らんか。

みづ子。歸るワ。

敬助。なんだ。

みづ子。歸るワ。

敬助。ちやこのバナ、の皮を投げつけるがサアどうだ。歸らんと返事したら勘辨してやる。

みづ子。歸らんと返事しないワ。

敬助。うむ？

みづ子。歸るワ。

敬助。ようし。くそ。

〔樹上からバナ、の皮をみづ子の顔に投げつける〕

みづ子。あら。ひどい。

〔手布を出してバナ、の皮を拭ひとる〕

敬助。サア。これでもか。

みづ子。えゝゝ。これでもだワ。

康吉。こら。何をする。サア猿降りてこい。畜生だともうこの上は容赦せぬのだ。

敬助。ようし。でや天降つてやる。

〔敬助樹上からとび下りてくる〕

康吉。サア。敬助謝れ。

敬助。謝らんど。なアおいみづ公。謝らなくつてもいいだらう。

みづ子。えゝゝ。かまやしないけど。

敬助。ともかくみづ公が餘り意地張るから不可んのだ。

みづ子。意地張つたのは敬ちゃんよ。

敬助。莫迦云へ。けど實に巧く鼻に中つたなア。俺は又外れるかと思つてヒヤ／＼してゐた。

みづ子。まア。ひどい。

敬助。實に奇蹟的に中るんだ。矢張り天は正者に味方するんだなア。だから俺の云ふことはきかなきゃ駄目なんだぜ。

みづ子。知らないワ。

敬助。なア。ぢや巴里から歸つて康吉と二人散歩することは許してやるとしてこんどの云ふ事はきけよ。又

バナ、の罰が當るぜ。なアだからさ。そのぶらんこにのれよ。

みづ子。いやだワ。

敬助。またか。

みづ子。「笑ひ乍ら」え、ぢや一体何するの。

敬助。ぶらんこ遊びをするんさ。

みづ子。ぶらんこ遊び？

敬助。さうさ。

みづ子。そして如何するの。

敬助。それでも糞もあるものか。分らん奴だな。ぶらんこ遊びはぶらんこ遊びさ。悠々と青空の下に飛翔するだけの話さ。

康吉。莫迦。

みづ子。分つてるワ。

敬助。小さい時俺達はお互ひによくやつたらう。丁度今の様に涼しい夕暮時だ。夕月が細やかに光をまして蝙蝠がちら／＼と飛ぶ時分だ。

康吉。小さい影は漸く濃く短くなつてゆく。どうだア。

敬助。さう。そのとき俺達は晝間の遊びに疲れた聲を張り上げて唄うのだ。

もう日が暮れた。皆んなで歸へろ。又明日遊ばう。

ねえつて。サア今になつても一度みづ公唄つてみる。

みづ子。いや。耻しいワ。

敬助。そんな莫迦なことはない。唄へ。サア唄はんか。

みづ子。怖いね。ぢや唄うワ。「小さい聲で唄う」もう日がくれた。みんなで歸へろ。また明日遊ばう。

敬助。ようし。けどみづちゃんもう一寸の間遊ばうね。未だ宵の明星様が出ないんだもの。

みづ子。――。

敬助。おい何んとか云へよ。なアみづ公面白いぜ之から子供ごつこをしようや。い、かいこの樹々の梢に空

美しき午後の散歩を最後としてもうお互ひにお別れだらう。二人の思ひ出の内にぶらんこ遊びがあるなんてロマンチックで素敵だぜ。な佛蘭西にでも行つてみる。ぶらんこ遊びをしてゐる子供達を見る毎にきつと今日の景色を思ひ浮べるからサ。なアこんな、アい、ぢやないか。サアみづ子ぶらんこ遊びだ。そこへ腰をおかけ。サアつたらサア。

みづ子。いやだワ。

「敬助は少女の手を捉へて無理に鞆にかけさす」

敬助。もう直ぐ御飯だけどもう一遍だけぶらんこに乗らうね。みづちゃん。

みづ子。――。

敬助。え、乗るワつて云ふんだよ。

みづ子。え、乗るワ。

敬助。僕は段々上手になつてくるよ。だから明日も明後日も又その次の日もしようね。サア約束に指切りをしようや。

「みづ子は鞆に腰かけ敬助はその前に立つて二人指切りする」

みづ子。指切り指切り。兵隊さんお馬にのつて通りやんせ。

敬助。ぢやサア二人でぶらんこにのらうね。みづちゃんあんた立つ？。

みづ子。妄坐る方よ。

敬助。ぢや僕が立つて振らうね。

みづ子。え。さうして頂戴。

「みづ子は坐し敬助は其前に立つた姿勢で鞆にのる」

敬助。おうい。康ちゃん。僕んらのぶらんこを押してくれよ。

康吉。莫迦止せよ。貴様は實に莫迦だなア。

「でも康吉は鞆に近寄つて其を押してやる。鞆緩かにゆれ始める。暫くすると敬助自分で動し出す」

敬助。いち。

みづ子。にい。

敬助。いち。

みづ子。にい。

「康吉鞆をはなれて地上に坐し再び煙草をくゆらす」

敬助。あの歌を唄はうよ。ぶらんこにのろうよ漣の――。

二人。港が見ゆるこの町のお山にたつたぶらんこに――。

「鞆漸く大きくゆれる」

敬助。怖い？ みづちゃん。

みづ子。あたし怖くないワ。
敬助。ぢやもつとゆらうね。

〔敬助ゆる〕

敬助。怖い？

みづ子。――。

〔間〕

敬助。怖い？

みづ子。――。

〔間〕

敬助。サアどうだ之でもか。みづ公。

みづ子。いゝえ。怖くないワ。「みづ子ひきつゝた聲で急に續きを唄ひ出す」糸とり遊びに飽いた時。鞠投

げ遊びに飽いた時。お山の上のぶらんこは――。

〔この歌の中にみづ子静かに手布を眼に中てる〕

みづ子。いゝえ。怖くないワ。いくらゆつても怖くないワ。小さい時にはもゝつと敬ちゃん亂暴ぢやなかつたの。

〔康吉立上る〕

康吉。サア敬助。愈々勘辨ならんぞ。貴様は遂々みづちゃんを泣かして了つたぞ。サア降りてこい。俺が對手になつてやる。

〔敬助始めてみづ子が泣いてるのに氣付く〕

敬助。なに。一寸待て康吉。俺は知らんぞ。みづ公。何だ貴様。貴様は莫迦だなア。一寸芝居をしたゞけぢやないか。其を本氣にしてやがる。莫迦。俺の顔をみる。そら俺は泣いてやしないぢやないか。
康吉。えゝい。だから煙草が消えちやつたぢやないか。

〔シガレットを地にすてる。この間に鞆鞆靜かに止つてくる〕

幕下る。

修二の御祈り

檜 村 實

「おきにはいりよ」

修二は今迄あれ程大丈夫だといふ自信を持つてゐたのに拘らず、いざ、花鳥模様のガラスドアの前迄來てみると、妙に威壓された様におち付け付いて、思ひがけなくも伴れの二人を顧みてかう云つたのである。

「君がはいりよ」と相手の一人が逃げをはつた。

「でも——」

「君が誘つたんぢやないか」

かう云はれてみれば、止むを得ず修二は最先に重い二重のドアをデックデックに押さなければならなかつた。

むつとするステイムと、まばゆい電燈の光に一時に押し付けられて、修二はちよつとたじろいたが、右手

にすらりと並んだ女給達の、「いらつしやいまし」といつた一勢の聲に、彈かれた様に、歩を刻んだ。續いて二人は、之もしがみ付く様に、修二の肩に手をかけて競り合つた。

手近なテーブルに座をしめる。

女給が待つてゐた様にやつて來た。

「何にいたしませう？」

修二は何も答へず下を向き、誰か口を開くのをお願いながら、身を殊更に屈めて、別にどうもしない爪先き等をいちづてみた。

——弱つたな、豫め心組みをしてをけばよかつた。何を食つてそれから何を誂へてと——殆ど初めて、こんな場所に足を踏み入れた修二は狼狽して了つた。

「何にするんだい、修ちゃん」

「さあ——」修二は顔をあげた。「君達は——？」

「僕は何でもいいよ、修ちゃんの好きなので——」

「ぢや——初めコーヒー飲まうか」

誰へともなく、かう云ふと、彼は自分の突差の處置が心から嬉しかつた。修二はコーヒーならば、一二度は飲んだ事を覚えてゐた。

女給は返事もきかずに立ち去つた。修二はほつとして眼をあげた。

「おい、それから何を食べ様？」

「君が決めなきや。」一人がメニューをつき出した。

が、数日前、暫らく振りでやつてきた叔父に、生れて初めてカフェーに連れてこられたきりの彼にとつては、凡てが奇妙な名前ばかりだった。ハムサラダ、フライドオイスター、ボークチャップ。

——いけないな——と思ふと、活字迄もおぼろになつて行つた。頼が急にはてつて來た。

——知らない事がわかれば、皆にも女給さんにも恥だ——修二はどうしても知つたふりをしなければならなかつた。——大膽に々々——彼は最初、この計畫に最も大きな力を與へた、こんな言葉を改めて又云つてみた。——出来るだけ物慣れた風をしなけりや——

そこで、修二はじつと背を椅子によりかけてもみた。頼杖をついて、「さうさね、何が、かな」等とも云つて見た。

だが、さうはいひながらも彼は、たえず、叔父との一緒の晩を執拗に思ひめぐらした。どろりとした赤褐色の液体がかかつてゐる魚もあつた。丸形の肉の刺身も。

——あいつなら食べ方もしつてゐるから——

で、修二は叔父が云ひ付けた名前を思ひ出さうと、又再びメニューを見初めた。

コールビーフ、ハツシビーフ。

修二は一つ一つ、心の中で力を入れて讀みあげた。

「お待ちごほさま」女給が愛嬌よく、コーヒーを運んできた。

「何か、お誂へ？」

女給は、かう云ひながら、一寸小首をかしげ、微笑を浮べて、ミルクを銘々のコップにたらしこんだ。

「お誂へおきまりになりました？」

彼はあはて、メニューに眼をおとした。

「コキールにしようか」修二はその時最先きに目に入つた名を、獨語の様に云つた。

「皆さんも？」

「ねえ」彼は同時に哀願する様に友達に顔を向けた。

「鱈ですがよろしうございますか？」

「ええ、結構」。

だが、彼は温い肉料理を想像して居たのであつた。

左も右も、彼は重荷を下した様に寛いで、コーヒーを啜る事が出來た。

「あつ忘れてた」だしぬけに一人が、かう云つて、懷から敷島を投げ出した。

修二は、それを見た瞬間、いち早くも、先刻の場面を思ひ出した。

「ぢやんけんして負けたものにしやう」

「だつて買はうつて云ひだしたのは君ぢやないか 賣を喫むといふ事より、買ふ事が恐ろしかった修二はかう云つて逃げ様とした。

「ぢや修ぢやんはのまないかい？」

修二はたと當惑した。別に普段から、のんでゐたのではないが、あの軽い、明い、そして華やかなピアノの音を聞くカフェーで、少くとも慣れた様子をする爲には、やつぱり、もつくりと烟を吐かなければ、どうしても調子がとれない様には感じて居た。だから伴れの一人が「賣が要るね」と提議した時には、「さうだよ」と思はず力を添えた程だつた。が、いざ買ふ段になると、矢張り、無口で嚴めしい目の父と、口八釜しい母親の元に、いはゞ、嚴格な家庭に育つた獨子の自分だつた事を痛くも知つたのであつた。

「そんな事——彼は云ひ淀んだ。

「だから三人で、ぢやんけんしやうよ」

かうして、三人は人通りのはげしい大通りで、眞面目な眼付きで、ぢやんけんをした。幸に、彼は勝つた。「しめた」彼はほつとして、ふいに聲高く叫んで了つた。

x

「何、にや／＼笑つてゐるのさ」

だし抜けに、かう云つた一人の言葉に、修二の繪は微塵に碎かれて、「えつ」と反撥的に訊き返した。そして、すぐそれに氣付くと、せき込んで、云ひ解の様に説明した。

「だつて、ほら、さつき皆でぢやんけんしたらう。そして僕が勝つて、しめたつて云つた時ね、傍を通つた人が、變な顔して僕をのぞいて行つたのさ。その顔を今思ひ出して——」

「はは、さうか」

「君の御父さんだつたら愉快だな、ははは」他の一人が事もなげに笑つて、ふうと烟を勢よく吐き出した。だが、修二はその言葉にどきりと胸を刺された。賣にのばした手を急に引きとめた。

「あつ？ 父親？——」

想像だにになかつた疑惑と不安の波が急に押し寄せてきた。——父親？ 莫迦な——彼は強く打ち消した。——今迄母さんとたしかに話して居たぢやないか——

——だが、直ぐ僕のあとから出たかも——こんな不安も又すぐ浮びあがつた。

彼はつとめて、その男の顔をはつきり描き出さうとあせる。だが悲しい事に、修二には、あのハの字によつた眼だけが、くつきり浮ぶだけで、鼻、口を追ひかけると、凡てが崩れて了ひばやけた輪廓だけが残つて、尙むりにせきこめば、却つて本當の父親がのぞきこんでくる。そして口さへもき、だすのであつた。

「何しとるのだ。何？ 賣？」

修二は耐へきれなくなつて、ふるひおとす様に首を振つた。

「あゝ、さうだ」彼は不意に叫んで了つた。

「何だい？」驚いた様に一人が訊ねた。

「はゝゝ、彼は心から笑つた。そして浮き々々つけ加へた。「あいつは眼鏡をかけて居なかつたよ」

「えつ何が？」

「さつきの男さ——」

「なあんだ」

友達があつけにとられて、彼を見守つた。

修二は急に氣持ちが軽くなつて來た。そこへ、ピアノの輕快な曲が初まつた事が尙更、すつきりさせた。急に女給の殆高い聲や、太い男の笑聲に織りこまれて、フォークやコップのかちあふ音が耳に這入り出した。カフェーだなどいふ感じが初めてしてきた。

貰を一本引き出した。見覺えた經驗から、殊更、固くもない巻をもんでみたりした。火を點じてから、ゆつくりと、修二は一場を見廻はした。

女給にからかつてゐる酒のみの職人。隅のテーブルでしめやかに語りあつてゐる戀人らしい若い一組。

と、突然、彼は、薄い笑を浮べてゐる一人の男の目にぶつかつた。

修二はあはてゝ、目をそらすと共に、急にマントを掻き合せ、何氣ない風で學帽をとりつけた。そして乗り出す様にして、友達にささやいた。

「帽子をおとりよ。そして筒袖はマントでかくさなきやだめだよ。あそこで笑つてゐる人が居るもの」彼は顎をしゃくつてみせた。

二人は一寸固くなつて取繕ふと、云ひ合せた様に皆は目を見かはせ、くくつと笑つて、各、新しい貰を口に啣へた。

「まあ、貰なんか啣んで、お巡査まはりさんに云ひ付けてあげてよ」

女給は、さも驚いたといふ風に、かふ云つて皿を並べ出した。あたりで急にしのび笑ひが起つた。

「云つたつていゝさ」伴れの一人が、吃りながら顔を赫くした。

その瞬間、修二の鼓動がだしぬけに、びたりとどまり、續いて今度は急速度に波を打ち出した。今迄、この彩色いろとられた空氣に全く幻惑されて居た、あの恐ろしい觸れたくない狀景が、女給のまるで異つた意味で云つた「お巡査さんに——」の一言で、被覆おほひをはねのけ、躍り出て來たのであつた。

彼はそれとなく、他の二人を窺み見ると、そつと懷の上を押して見た。そして固い四角い觸覺に、安堵と疑惑とを交錯した氣持ちを覺えた。

x

探しあてた事に、異常な喜びを感じて、彼は、ぎつしりつまつた棚から一冊の本を引き出した。

——蜃氣樓——

黒無地の地味な装幀も、この金泥の無難作な表題も、何となく明い喜びをそゝつた。之が近頃、學校で三人寄れば、必ず話題にのぼる、あの大家の近作かと思ふと、斷片的に聞いてゐるその筋等が、まぎ／＼と浮びあがつて、彼は上氣した様にばら／＼と頁をめくつた。すると、一刻でも早く讀みたいといふ氣持が胸一杯に湧き出すのであつた。で、彼は箱に收めもせずに、

「之下さい」と、振り向くなり云つた。

が、今迄、寢さうな眼をしばたき、凍んだ手に息を吐きかけてゐた小僧の姿は、そこには見えなかつた。修二は不満だつた。彼は本を手にしたまゝ、表へ出たり、奥をのぞいたりした。が、やつぱり姿は見えないなかつた。

彼は、いら／＼して來た。

「何處へ行つたんだらう」

心がせけば、せく程、益々早く讀みたい衝動があふられた。我しらす下駄の齒を、こつ／＼ならし出して居た。一旦箱に入れた本を、また出して見た。

ふと、氣が付いて、懷に手を入れてみた。

「ある／＼」修二は手に臺口が觸れると、小聲でかう云つた。そして更に、口を開けて、五十錢銀貨が四枚確に輝つてゐるのを見ると、當然な事ながらも、嬉しい安堵を感じた。

だが、小僧はまたこんど姿を見せなかつた。

修二は、悲しい程の腹立たしさを覺え、しかも、ちつとして居られない程心がせきたてられた。

と、だしぬけに、彼は身体が震えたかと思ふと、急に固くなつて了つた。恐ろしい考へが閃いたのであつた。

修二は、はふり出す様に本を放した。

が、次の瞬間、彼の視野は全く暗くなつた。小僧も、蜃氣樓も、銀貨もなかつた。

無意識に蹙音を忍ばせて、店先き迄出ると、彼は、何か恐ろしく大きな力でつきとばされた様に馳け出したのである。

「氣を附けろい」

彼は、はつとした。人力車が勢よく、通りすぎた。彼は四つ辻にたつてゐる自分を見た。動悸が恐ろしい音をたて、ゐた。手足が震えてゐた。

彼は、無理に呼吸を押し付けた。つゝ、と續け様に、息がのみこまれると、すぐ後に、太い吐息が、大きな音をたて、もり返した。

「僕は盗んで了つた」彼ははつきり知つた。

彼の虚な眼に、自轉車がすぎた。男の欠伸が映つた。

修二は、そつと懷をのぞいた。——蜃氣樓——金文字が眼を射た。

修二はマントの襟をかき合はせると、靜かに歩き出した。あやまつて歸してこやう、と考へて。

だが——五六歩にして、つと彼は立止つて考へた。——一体許してくれるかしら——
小僧の寝さうな顔が浮ぶ。續いて、あの剛愎相な青黄いそして常に胡散臭く、客を見つめてゐるおやぢの眼が現はれる。又小僧の顔、おやぢの眼……。

——それに一体どういへばいいのかしら——

彼はかう考へてくると、當惑と絶望とに、全く抱きすくまれて、一步も進めなくなつて了つた。

——だからといつて、お金をもつてゐれば、きつと母さんに見付けられる……捨てちまはうかしら……でも——

つと泪が滲み出た。急に、修二は自分が悲しくなつた。誰にでも縋りついて泣きたいと思つた。

彼は、二三歩あるき出しては、又バネ仕掛の様に止まつた。泪がどめどめなく流れた。

——僕は盗んで了つた、盗んで了つた——どうしても、こんな氣持が離れなかつた。

「母さん」彼は縋る様で心の中で叫んだ。

が又、今更どうし様もないんだといふ氣にもなつた。他の本を買ふわけにも行かないし、とも思案した。

「うん、さうだ」修二は救はれた様に、拳を握つた。「カフェーへ行つてやれ」

彼は、どうした弾みか、何のゆかりもなく、ふと近月初めて叔父に知らされたカフェーを思ひ出したのである。

ピアノ。女給。そして名もしらぬ料理。

修二は、あれからもう一週行きたいと思つてゐたカフェーに、何故もつと早く氣付かなかつたのかと思つた程、その考へを喜んだ。

が、次の瞬間、彼は又躊躇つた。

——獨りでカフェー？——

「中學校時代にあんな處へ、友達同志などで行く様になつてはもうお終ひですよ」「それにあの女給——」こんな母親の日頃の言葉や、しかめた顔迄が急に、くつきり浮んできた。

——でも今夜一遍きりなら——

そこで、彼は近所の親しい友達を誘ふ事にきめた。

「盗棒——」

「小僧が悪いんだ」

「神様の罰——」

「みんなと一緒に行けば許して下さい」

途中、絶えず修二の心の中の二人がこんな問答を續けてゐた。そして又一單カフェーの場面に變ると、

「大膽に、大膽に——」

「物慣れた調子で——」等といふ言葉が、次から次へと、修二に力を添えていつた。

だしぬけに、彼の眼の前を烟の輪が勢よく迂り去つた。

「おや」と思ふと、伴の二人がどつと笑つた。彼は一寸上眼使に窺み見た。

女給が口を窄めて、又一つ飛ばした。内側から、むくり／＼と、ひつくりかへつてゆく輪に彼は云ひしれぬ喜びを感じた。そしてその輪の廻轉と共に、盗み等といふ風景は速に姿を消して行つて了つた。

修二は、輪が飛び上る様にして消える迄、ちつと見つめてゐたが、ふと、無言のまゝ、蓑を一本つまみ出して、女給に渡した。そしてひちやうに注意深く彼女の口先きを見つめ出した。

十幾つか目の烟の輪がテーブルの花瓶にぶつかり静かに崩れた時、修二達は席をはなれた。

——みんな云つて了へ——表へ出ると、急に呼び返された、あの忌はしい記憶が、烟の輪から首をつき出して、彼をこづき出した。修二の身体は又しても震へ出した。

本當に云つて了はうか、とも思へた。さうすれば心が晴れやかになるに違ひないとも考へた。

「あのね」彼は思ひ切つて口を切つた。

だが、傍には友人は居なかつた。二人は、かなり、後ろ方で、何か物興しながら、高からに笑つて居た。

「おーい、何してゐるだ」

x

一人が馳け出して來た。

「今ね、輪を出さうと思つたんだけど、駄目なのさ」さう云ひながら、その少年は、はがらかに笑つて、火の付いた蓑を棄てた。

修二は友達の言葉ですつかり、今の自分の企てを忘れてしまつた。そして、

「僕にも一本おくれよ」

修二は、學帽をかぶつかまゝ、色々に屑をすばめて烟を吹きとばした。

修二は家の閤を跨いだとたんに、又さつきの蓑屋の前の男の顔を、ふと思ひ出した。

家の中はひっそりしてゐた。暗い電燈が冷く感じられた。一寸の間、彼は耳をそばたてた。だが何も聞えなかつた。修二は不安になつた。

「母さん」彼は思はず呼びかけた。續いて「お父さんは？」と訊いた。

「何ですね、そんな大きな聲をたて、お父さんはお家ですよ」

修二ははつとした。いそ／＼と茶の間の襖をあけるなり、彼は云つた。

「之です」

彼の胸は急に波を打ち出した。

父親は第一頁をすこし読み出した。

修二は早く、返して欲しいと思つた。今にも、父の鋭い目が、「修二、お前は」と云ひかける様に思へて仕方なかった。

だが、父親は眼鏡を拭き出し、新しい頁をめくつた。待ち切れなくなつて彼は手をさし出した。

父親は、讀むのをやめて、ばら／＼とめくると、一寸又表題を見て、

「うん、蜃氣樓か」と云ひながら彼に渡さうとした。

「あなた、あたしに一寸」母親が横から手を伸ばした。

修二は益々いら／＼してきた。

「まあ、之が二圓」母親は驚いた様に定價の處をめくり、「成る程ね」といつた。

「高くなつたものね」と獨り言の様に云ひながら中を開いた。

「早く下さい。讀みたいんです」

彼は、ひつたくる様に、それを手にすると、ほつとして次の部屋に去つた。炬燵にもぐり込んでから、徐ろに頁を開いた。

不思議に「盗み」等といふ事は思ひ出ない。たゞ一頁／＼に喜びを感じるだけであつた。

修二は一氣に五十頁程を讀んで了つた。一くだりの筋が終つた時、歡喜と疲勞とから彼は、大きな息を吐いた。と、

「そんな事云つたつて、本買だけがあの子の道樂なんだから——」

かふ云ふ父親の聲が、ふと修二の耳に鋭く聞えた。彼は射すくまれた様に固くなつた。兩親の會話は、それきり彼には、とだえて了つた。

蜃氣樓、小僧、ピアノ、烟の輪、それ等が一時にかけめぐり出した。

修二はぼんやり立ちあがつた。そして、次の部屋の神棚の前に、行儀よく坐りこんだ。

「神様、お許し下さい。もう決していたしません」。

修二は、手を合せて、何べんとなく、口の中でかう云つてお祈りした。

そして最後に、

「誰にも見付かりません様に、神様神様」

修二は固く／＼眼を閉ぢ、額を疊にすり付けたのであつた。

北辰會部報

講演部

我が講演部は昨年度から始めて部員制を採用する様になりましたが、爲に部員相互が思索の上、發表の上、態度の上に相啓發するこゝさが出來て、その間に得る所少からず進歩をしたことは否定することは出來ますまい。冗筆はぬきにしまして、左に十二月末日迄の我が部の行動を報告いたします。年改まつてからも、東京帝國大學主催全國高等学校辯論大會や大討論會、その他二三ありますが、それ等の報告は都合により次の會誌に譲られなければならない様になりました。

◎練習會 格別の事情がなかつたら毎週一回必ず至誠堂で開きます。大會前は特に二三回は開きます。時には中等學校の講堂を借りてやることもあります。普通、部員以外の聴衆はあまりありませんが諸君の來聴を歓迎します。出演者は何時も聴衆の如何は眼中になく眞面目に熱心に練習します。今その二三回を紹介いたしませう。

◎新入生歡迎演說會 (五月一日)

- 一、開會之辭 文三丙 三森良二郎君
- 一、偶 感 文一乙 長田 清道君
- 一、信念に生きよ 文一甲 水口 菊一君
- 一、農村を救へ 理一丁 越後 一雄君
- 一、藝術に生くる者の懺悔 文一乙 堀田 武俊君
- 一、偶 感 文二甲 萩森 秀市君
- 一、宗教の眞面目 文三丙 加藤 清一君
- 一、閉會之辭 理三乙 稻波 爲孝君
- ◎春季公開講演會 五月卅日(土曜) 晚七時より至誠堂にて開催。聴衆約三百。皆熱心に最後迄靜聽してくれた。各辯士の演説も洗練されてゐて大變聴衆に好印象を與へたらしい。十時半閉會。
- 一、開會之辭 文三丙 佐々木鏡圓君
- 一、生の喜び 文一乙 長田 清道君
- 一、傷ましき現代人の姿 文二乙 小川 保男君
- 一、科學より宗教への思索 文二丙 湊屋清太郎君
- 一、恒久平和確立の第一歩 文三丙 三森良二郎君
- 一、友に語る 文二乙 寺野 一愚君

◎北陸中等學校辯論大會

一、閉會之辭 文二甲 大河原保彦君
我部年中等行事の一たる北陸中等學校辯論大會を六月七日(日曜)午前、午後の二部に分けて至誠堂に於て開催した。参加校十九校の多數に上り、實に北陸此種大會の一偉觀であつた。

- 午前ノ部 (九時十五分より)
- 一、開會之辭 駒井 教授
- 一、重大の成果 石川農業 津田 平作君
- 一、子供の心に歸れ 小松中學 北川 金作君
- 一、辿り行く道 石川工業 奥田 英三君
- 一、反國家思想を駁す 金澤一中 川西 友吉君
- 一、信念に生きよ 高岡中學 志甫三郎平君
- 一、混沌の巷に迷へる者よ 金澤商業 松村 豐之君
- 一、眞實に生きよ 神通中學 堀 定雄君
- 一、來るべき光明の天地は 礪波中學 寺島 養三君
- 一、能力 福井師範 名津井鼓義君

- 一、生くる日の使命 富山商業 安藤 清治君
 午後之部 (一時より)
 一、肇國の理想を成就せよ 小松商業 土居 晃君
 一、現代社會と吾人の希望 七尾中學 清水 文明君
 一、精神文明への反省 上市農業 四橋 實君
 一、百合の花 富山中學 金田 重雄君
 一、若人よ須らく現代を悲觀せよ 敦賀商業 富永 定雄君
 一、大暴風雨は將に到らん 金澤二中 唐津 秀雄君
 一、大和民族の使命 福井商業 欠 精君
 一、徹底の生活 高岡商業 板垣 與一君
 一、彼等も人間也 魚津中學 大崎 榮吉君
 一、講評 武藤 校長
 一、尺八吹奏 部長 江上 教授
 一、閉會之辭 部長 江上 教授
 開會前尺八吹奏中に審査を終り、武藤校長から夫々褒狀を授與された。

- 一 等 高岡中學 志甫三郎平君
 二 等 小松中學 北川 金作君
 午後之部
 一 等 敦賀商業 富永 定雄君
 二 等 富山中學 金田 重雄君
 三 等 高岡商業 板垣 與一君
 終りに審査の勞を取つて下さつた委員の諸先生に厚く御禮申し上げます。午前部の諸君も午後部の諸君も概して優良であつたので、三等迄賞を與へました。
- ◎四高聯合辯論大會
 昨午非公式に八高辯論部を迎へて至誠堂に於て聯合辯論大會を開いたが、今年は公式に五名の選手を瑞穂に派遣し、七月十三日より八高講堂に於て聯合辯論大會を開催した。當日は對八高庭球クラブの試合があり、習々日十五日は野球戦が行はれるのである。我等は又その間に立つて辯論をもつて戦つた。
- 一、開會之辭 八高 若林 秀善君
 一、理想主義と現代 八高 林 靈松君
 一、傷ましき現代人の姿 四高 小川 保男君
 一、國民生活の懺悔 八高 鬼頭 禮藏君
 一、科學より宗教へ 四高 湊屋清太郎君

- 一、静やかに擔ふ 八高 加藤 一郎君
 一、思想的懊惱の裡より 四高 寺野 一愚君
 一、自然法則の體系 八高 小澤久之丞君
 一、恒久の平和を求めて 四高 三森良二郎君
 一、我 觀 八高 瀬戸 勝治君
 一、微光を辿らん 四高 加藤 清一君
 一、閉會之辭 八高 大山 侃爾君
 最後に私達の爲に會場迄足を運んで下さいました諸先生方や先輩諸兄、特に連日の疲れに綿の様になつてゐる身体をおして私達の爲に來り下さりました應援團委員の方々に深く感謝します。
- ◎七月十八日 京都帝國大學主催全國高等專門學校辯論大會には我部は左の選手を派遣しました。
- 「二大潮流に直面して」 稻波 爲孝君
 昨午は富山縣の方へ出掛けた。今年は福井縣の方へ行脚しました。
- 「第一回」 八月廿五日
 小松町蘆城小學校にて開く。聴衆四百を越え、常町未曾有の講演會である。
- 十時四十分盛會裡に閉會。

- 一、開會之辭 三森良二郎君
 一、新しき社會の建設と吾人學徒の使命 藤田 信勝君
 一、宗教私觀 寺野 一愚君
 一、帝國の使命 法學士 竹田 儀一氏
 一、黎明に直面して 河合喜代治君
 一、國民思想と危險思想 佐々木鏡圓君
 一、人類と平和 三森良二郎君
 一、十字街頭の日本 帝大 酒井 治吉氏
 一、三種の生活 部長 江上 教授
 之を始めて大聖寺、山中、福井、武生に於て順次開催致しまして豫期以上の成功を得ました。
- 扱て此學を盛ならしめる爲に御参加下さいました竹田、酒井の兩先輩に感謝いたします。尙種々御援助下さいました四高小松會、大聖寺町學生會、山中町精華會、福中會、府中會其他の方々に満腔の謝意を表します。
- ◎秋季公開文化講演會
 十一月六日市公會堂にて開催。降雨の爲か聴衆マキシム四百位しかなかつたが、各辯士の熱辯は聴衆に満足と與へるに充分であつた。閉會午後十時半。
- 特に此學に御参加下さいました伊藤教授に紙上を借りて厚く感謝の意を表します。

- 一、開會之辭 部長 江上 教授
 一、混沌の中より 水口 菊一君
 一、如何に生くべきか 越後 一雄君
 一、行 路 長田 精道君
 一、善の根據 瓜生 順良君
 一、苦悶の生産 藤井 義淨君
 一、荷車は星に 南野 衛二君
 一、隨 順 佐々木鏡圓君
 一、天國と地獄 伊藤 教授
 一、閉會之辭 湊屋清太郎君
- ◎校内雄辯大會
 十一月十六日放課後至誠堂にて開催。本年最初の企なるも左記六名の辯士を得、熱心に演説をされ、聴衆又可なり多く大體成功と言つて差支ないでせう。
- 一、開會之辭 萩森 秀市君
 一、誇り驕翔せよ 文一乙 清水 潔君
 一、物質主義が精神主義か 文一乙 牧野 愛吉君
 一、我等の覺悟 理一丁 西尾 武夫君
 一、浮び出づるまゝに 文一乙 各務 勇君
 一、虚無思想より見て 文一乙 山口久太郎君
 一、人さは何ぞや 文二甲 江崎 光好君

- 一、閉會之辭 湊屋清太郎君
 審査の結果翌日發表。江崎、各務の二名當選し、講演部メダルを贈る。
- 審査の勞を取つて下さつた諸教授に厚く御禮申し上げます。尙この會は毎年開催するつもりでありますから校友諸兄の多數御出演を希望しておきます。
- かくして今後は一層思索に体験に眞に戦ひ眞の魂の奥底から迸り出る叫びをして益々大ならしめんことを誓つておきます。
- (一九二六・二 湊屋識)

六號雜記

×月×日(木曜)

朝起きて戸を開くと、S川の上は桃色の霧がこめて居た。初めて新春の芽生えを感じたと思つた。やはらかい感じが河洲に光る残雪の鋭さをあやふげに抱擁して居る。追憶の香につき纏れて、こんな朝をいつかの年にも持つたと思つた。

×月×日(金曜)

今日はまた何んと言ふ天氣だ。北國のカプリシヤスな天候が自分の頬に痛い吹雪を贈つて呉れるのだ。街路が滑つて危い。自分は橋のたもとで風車のやうに吹きまわされればならなかつた。こんな時生命の抵抗がフオルウェルツをさげふ。

×月×日(土曜)

夜半。犀川の水音を聞く。

母が此の地へ遊びに来た時、夜中に頭をもたげて「雨が降つて居るのかへ」と言つたのを想ひ出す。

×月×日(日曜)

(送別會の夜)遅い腕が後から自分の首を捲いた。自分は友人の膝の上に自分の頭を横へた。

——愉快だらう。

友人は自分の頭髮をなでた。自分は煙草をふかし乍らぼんやり皆んなの踊るのを見て居た。

(淋し相にしていつしやるのれ)之で淋し相に見えるなら俺はどんな顔をしなければならぬのだい。

×月×日(月曜)

本林鋼治、張飛關羽であるよりも玄徳、孔明でありたいと言つてよ。す。「蜀時代」を読んで呉れたと見える。本林と玄徳であり孔明たれ。だが彼はより多分に張飛關羽の血を引いて居はしないか。

×月×日(火曜)

勤勉なる學生として六時間の授業を終つて歸るのが懶い。

歸途齒醫者による。齒の中で鐵の棒がまわる。一大しめめ面を見て居る看護婦の顔よ。お前の青春の心臓が俺の變ちきりんな顔を見て何を考へて居るか、俺がそんなことを考へる暇があらうかへ。俺の齒髓の中では今大震災がはじまつて居るのだ。

×月×日(水曜)

ストーブを圍んでT、好い氣持で與太る。將來自分のことを小説に書いて呉れと言ふ。そのわきからO、自分の事も書いてくれるとねだる。

「一言で宜い。昔、級の中に馬鹿に氣が小さいが至つて氣の好い男が居たつて言ふことをな。T、あいつが悪く書くと飛び込んで来るぞ。れえ、Sさん」

「俺が悪く書かれたつて宜いあ」二人共二十貫をこす級の二大男なり。(精一)

元氣に委員たちの相手をして下さつた部長先生の印象は自分達にとつて最も太いものであらう。雑誌部委員の集りはいつも先生を向にまわしてフォークを握り卓をたゞき零々の駄辯に終始するのが常であつた。

年の効さ申さうか十人程躍起になり乍ら先生一人の風發的な文藝論に口惜しがつたものである。先生は雖然、愈々好々爺である。物好きな連中に夢の話が説かれる時の顔が本氣なのかさぼけて居るのか茫莫としてわからぬのも面白い。

夢の先生よ。夢の玉手箱を抱へていつまでも元氣で居て下さいよ。

一五・二・二〇

沈黙してゐたい。冥想してゐたい。いや、貧しい自分を省るさ、何にも云へない。

でも、今度はお別れ。この北の國さ。憂鬱な雪の國さ。二十四度の春

秋、私を育ててくれた故郷さ。そして、松明を高くかかげて進む所は、中原!

私があまりに自己を信じすぎるために、或は迷惑を感じ、或は傷けられたかも知れぬ人達に、深く深くお詫びせねばならぬ。

それらの人達や、私を導いて下さつた人達——私の人生に少しでも觸れて下さつた人達には、限りない感謝を思ふ。

金澤は静かな町だ。森の都だ。ひつそり土塀の續いてゐる町だ。

春陽にうまゐした夢香山。梧桐に細い月の落ちた寮の窓。枯薄にポートを止めた河北瀧。感激した頭に心地よい凍つた電車道。思ひ出は盡きない。

人生を美しい夢の様に見るのが、幸福になる一つの道かも知れない。苦惱さへも思ひ出の中では、赤いシヤツボの道化者ではないか。魂を春

の野邊に置き忘れたやうな人生も、いだらうと思ふ。

太陽はすばらしい。太陽の輝く所、すべての苦惱が朝露の如く消える。

陰鬱な冬の日でさへ、太陽の微笑がどんなに蠱惑的である事か。心が軽んでうれしくなるさ、いつも太陽がふくよかにあふれてゐる塀の蔭を思ひ出す。

愛は、人の世の太陽ではないだらうか。

みんなの人がうれしくなるやうな世界が欲しい。何をするにも、強ひられたり責められたり、抑へられたりされない世界は、どんなにいいだらう。

小鳥のやうに飛びまはつたり歌つたり、草花のやうに美しくなれたら!

ほんさに自由な國がどこかにないだらうか。働きたい時は、いつでも鐵をさつて野に立てる所が。頭にひ

らめく言葉を、そのまへんにのせてもいゝ所が。

可愛らしい人形が欲しい。眼のばつちりさして唇の赤い……。そして思ふ存分愛撫してみたら……。

相當なお金が出来るとしたら、私は第一に大きいベッドを買はう。そして真白い毛布にくるまつて一日ねころんでみよう。眼が覺めて赤い夕陽が斜にさしたら、香高いエジプトの葉巻を吸ふのだ。

こんな事を思つてゐるさ、私はお伽噺の王子になつてゐる。黄金の簪火には蓬萊の島に住む白魚の油をたたへ、仙境の魔女が織り出した七色の絨緞には珊瑚の机をすゑ、極樂鳥の羽根は神秘的な言葉を綴る。

されど、されど、冬の夜更けに火鉢が冷える時、私は瘦せた胸を抱いて身震ひする。美しい幻影がけし飛ばされる程。

天井の煤けた屋根裏の部屋には、古びた机とブランクの多いノートを積みこんだ本棚が、殺風景に並んでゐるばかりだ。そして私は、昨日も今日も何にも出来なくて、カルモチンを飲まねばならない。

何んにも思ふ通りに出来なくて、限らない悲観に沈む事がよくある。そんな時私は、本當によく出来る事がまだ見つからないのだ、と思つて自ら慰める。愚人の夢だらうか。然し、もしそんな夢がなかつたら、私は今まで生きてゐなかつたに違ひない。

夢！ 夢！ しかも現實は嚴然としてゐる。夢の國に降る雪は美しく暖いが、この世の雪は泥にまみれて冷い。熱い焼芋を懷にして行く労働者を思ふ時、私は何とも知れぬ情熱の湧き上るのを覺える。

劍をさつてギリシャの革命に馳せたバイロンを思ふ。

「今に見る！」こんな言葉が思ひ出される。

ペンは徒らに動く。でも、一体私は何を云はうとしてゐるのか。寂しくなる。

やつぱり沈黙してゐた方がよいのか。
——二・一八・鋼冶——

◇

第四百號に對する諸兄の御好評に、恐縮を重ねつゝ感謝します。今度は、編輯を二年の委員の方に大部分やつてもらつた。坂田病み、太田臥し、本林又健康を害れ、更に「生儀病氣のため」の欠席届に、診断書を添えて出して居た私を合せ、三年四人殆ど筆をさり得ず、加ふるに、三學期の故にか、一般からの原稿が思はしく集らなかつたの

で、この處、編輯子かなり苦しめられた事と同情する。

表紙には随分冒険を試みた。恐らく宇宙廣しと雖も、未だ曾て、こんな紙質を表紙に用ゐた本はないと思ふ。体裁の如何は出来た上でないけれど、何とも云へないが、もし悪かつたら責任はかゝつて私一人にある。だが、その際には、來年の素ばらしい發展が償つてくれる事を、共に期待する事にしませう。

原則としては、之で北辰會雜誌の編輯さもお別れだ。感慨のない事もない。でも、死期の近づいた老人の様に、ひよろ／＼と鉛細工された鐘を見、ぢやり／＼とさめく電鈴を聞いては、感慨もくそもありはしない。「自然科學に征服された」こんな、顔をしかめた友達の戯言にも、わつはつは——等と笑へない淋しみがあつた。もつとセンチメンタルになれば、試験最中の拍子木の音が懷しまれる。なんざいつても、過渡期の私達には、あの電鈴と神經衰弱には立派な因果關係がなりたつて見える。大

通りでは、一時間に自動車が一臺ふえ、一日に電車が三輛増す。そしてまあ、なんぞ夢が、その姿を刻々に消してゆく事なのだらう。

夢さへば、まだ／＼犀川には、それがあつた。いつだつたか、雪で眞白な河原に一羽の鴉がおりたつた。そして、一わたりあたりを見まはすさ、しのびやかに淺瀬に脚をびたし初めたのです。で、どうしたと思ひます？ 小魚を探したのでも、又は水を飲む爲でもなかつたのです。いゝえ、彼は注意深くも行水をやりに出たのです。鴉の行水——。一浴みしては、いかにも恥し相にあたりを見廻して居る様子。塵埃さ音響の中では、さても思ひもよらぬ姿です。犀川の川水は清らか、雪さ鴉、そして行水。でもその繪は一分さた、ない内に消されて了つた。十二時を告げるあの斷末竈にあける象のうなりのやうな汽笛のため

に。汽車で思ひだしたが、嵐の晩の汽船の警笛は悲しいものだ。こゝ——

さ重くて鋭いシベリア風が寒さ雪を一時にたゞきつる。兩戸が震へあがる。電燈がぎざぎざしく息をつく。そして遠くへざわめきが消えた。さ、遙かにさざれ／＼の警笛が日本海から流れてくる。屠殺場にひかれてゆく牛が、櫻橋のたもと迄來ると必ずあける咆哮さ／＼が似てゐる。この世、この生へ對する最後のあの許へには絶望と諦観ばかりが見られるのではない。いつも明い鏡が織り込まれてゐるのが感じられる。丁度この様な——私は、柔かに白く衣きた炭火に、火箸のさきで細く赤いすぢを入れては、手にもつた占のトランプを下に置くのである。

占はいゝものだ。ひさり居の夜ふけに、明日の運命を托する占はいゝものだ。これ程に自分の弱さ、いや、生きてゐる弱さを露はに見せつけられるものはない。たつた一枚の札の順序で、明日一日の明が散はれる。「今のは、きり方がわるかつた」等と自分で自分に云ひかしては又新しい一枚を並べ初める。ストリンドベ

ルヒの氣持ちもわかるし、「復活」の裁判所の十三歩も同じ氣持ちだ。こんな心持ちは、決してキリストや釋迦にのみ恵まれた特性ではない。豫言者は最も弱い人間だ。最も甚だしい運命の子だ。丁度ニイチエが最も弱い人間性をもつて居た様に。與へられた真も、もう切れ相だ。下らない事を書いて失禮しました。最後に、部長を初め色々御面倒を見て下さった諸先生方に厚く御禮を申し上げます。——二・二一・實——

編輯の後に

四つの小説と一の戯曲をふりかざして、到々此處迄泳ぎ付きました。何になつたか——たゞ何事も云ひたくないのです。

皆が悪いのだと文句を云ふ力も私の不才をはがみする元氣も無いのです。

合憎天氣は好くないし、原稿は数少なに、たゞぼんやりした日が續きました。「短歌號」そんな聲を聞く度に泣き出したくなりました。孫子の代迄雑誌部の委員になる勿れさか、先輩の云ひ残してしたが——。

こんな仕末ですから太田君と樫村君を煩はした装幀は第二として、包合して居る處の好くない事を斷言します。

然も今年も余儀なくされた三年生への敬意と原稿の不足から随分の反對を退けて編者專斷の舉に出た小説さへ見参する結果になりました。

さてこんな作品では——中央公論級位の自惚を持つ作者があるなら、はばかりですが日本の青年は皆偉大なノヴェリストでせう。こんな仕末も要するに私の至らぬ處。詫の一つ。

泣言を忘れて——

雪、人々々々々……

そして第百五號は出来上りました。言葉が掛けられる喜びを持ちたいのですが。

三年生諸君に改めて申します。私達は無事に生きて参ります。たゞそれだけのたはむけ——それ以上の言葉は……

そして昨年、一年間此の雑誌を守つて居た坂田本林樫村太田諸先輩の御苦勞を感謝致します。

春——では言葉渺なに一年諸君の投稿を希望して。

——一五・二月・康之助——